中世におげる六郷満山

―六郷満山の研究七・八―

中野幡能

目次

六郷山支配機構の変遷
(一) 別当職の交代
(二) 六郷山総廟日枝社
(1) 勧請年次の考証
(2) 六郷山日枝社の地位
(三) 六郷山執行職の成立
(四) 大友能直の侵入
(五) むすび ―武士に対する抵抗―

六郷山の宗教儀礼
(一) 六郷山の信仰
(二) 鎌倉時代の法会
(1) 本山本寺分
(2) 中山本寺分
(3) 末山本寺分
(三) 六郷三山の法会
(四) 法会行事の来由
(五) むすび

六郷山支配機構の推移

(一) 別当職の交代

山岳寺院の管理が、その山麓で行われる例は多い。六郷山の管理が豊後国国東郡来縄郷払井田の東西別当及び惣堂達によつて行われた事は既に述べた。(1) これ等の僧は何れも他の院主と同じく在俗僧である場合が多く、個々の山内寺院の末寺末坊が出家僧であるのと区別される。惣堂達は堂達の管理者である。堂達とは神社の神人に当る僧侶である。

六郷山東西別当が平安末よりだんだん勢力を失つて行つた経過は既に触れたので詳述することは避けたいが、六郷山別当が宇佐宮弥勒寺所司(2)であつたから、別当の権力は弥勒寺の権力と平行して衰えて遂に六郷山から離れてしまうのである。かくて宇佐宮が近衛家、弥勒寺が石清水八幡を本家職に仰いだ如く、六郷山も本家職を比叡山に仰いだのは応保二年（一一六二）であろうと推定(3)したが、更に建久三年（一一九二）には領家職無動寺別院という新しい立場をとり、六郷山は宗山執行職という新しい職を立て(4)、実質的な支配関係は弥勒寺から離れ、たゞ儀礼的関係が残るだけとなつた。こゝに六郷山に対する叡山の直接支配が深められるようになる。今このような状況をみるために、鎌倉時代の領家側と六郷山の関係をみる文書を表示することにする。

使者僧連署下文	一一九七	建久八・十一・十	使者僧千祐房等、源実をして故禅正房屋敷公事を免ぜしむ	使者僧千祐房外三　余瀬
延暦寺政所下文	一一九八	〃　九・四・日	延暦寺政所、中山神源をして円力十力の妨を止む	修理別当法眼和尚外四　霊仙寺
別当伝灯大法師下文	一二〇一	建仁二・九・日	延暦寺（無動寺カ）別当、朝範を安堵	別当伝灯大法師　余瀬
惣公文安堵状	一二〇四	元久三・四・廿六	惣公文所上座大法師、朝範に領掌せしむ	惣公文所上座大法師　〃
朝範申状	一二一五	建保三・三・五	朝範安堵ノ外題をうく	
本主房使者僧下作職宛文	一二一五	建保三・四・一九	別御房下知により朝範に安堵	本主御使僧範実　〃

御使藤原某下作職宛文	一二二一	承久三・十・日	長小野内を朝範に下作せしむ	御使藤原 〃
小寺主外連署状	一二二八	安貞二・五・日	将軍家の祈禱を、六郷山衆徒に命ず	小寺主法師外九名（三綱）長安寺
惣領主宛行状	一二三六	嘉禎二・正・廿八	財万払ノ田畠を橘太子に宛行ふ	惣領主良隆 余瀬
別当下知状	一二六七	文永四・十二・日	別当、定妙に安堵	別当 余瀬
別当下知状	一二六八	文永五・十・日	〃 〃	〃 〃
青蓮院宮令旨	一二七三	文永十・二・十八	青蓮院宮澄覚、中納言僧都をして六郷山執行祐快に安堵	法眼（奉） 〃
良親奉書	一二七五	建治二・十二・八	財万某別当の命を奉じ大力名公事安堵	良親（奉） 〃
〃	〃	〃	〃 の命を奉じ良親大力名三段につき施行	〃 〃 〃
青蓮院宮令旨案	一三一五	正和四・四・廿三日	禅定房をして範秀と幸益丸の相論を安堵	法印玄信（奉） 〃
別当施行状案	一三一五	正和四・七・ 日	別当幸益丸の非法を停止	別当法印 〃
別当下文案	一三二七	嘉暦二・六・一七	別当、夷山内蓮祐払長祐に領掌せしむ	公文貞長（奉） 〃
権別当下知状案	一三二七	〃	権別当仁王丸、長祐に安堵	権別当仁王丸 〃

これによつてみる如く、叡山の六郷山に対しての文書は延暦寺政所又は無動寺別当からが多くなる。初期に於ては次の如き文書がみられる。建久八年の余瀬文書に

下　源実所（事）

可令免故禅正屋敷公口

右、於件所ハ、至示後々将来、於公事者ハ令免行之状、如件

建久八年十一月十日

（裏書）○下同

「千祐房」使　者　僧（花押）

「常敬房」先　達　大法師（花押）

先達大法師
「観行房」
先達大法師（花押）

この文書にみる如く、延暦寺又は無動寺別当の命をうけて、「使者僧」等が連署して、代官として施行している。先達大法師の先達は天台修験の官名であり法師は僧位である。六郷山の中山本寺の衆徒が長承四年（一一三二）の余瀬文書にみえるがそれによると八ケ寺の中住僧二六人、先達大法師七人、大先達大法師三人、計三六人がみえる。(5) 又、余瀬文書年号不詳夷山院主職所領坪付によると、連署の観行房がみえるので、使者僧以下の僧は在地の六郷山僧であり、長承四年の文書からすると先達大法師は院主層である。そこでこの千祐房は夷山院主職が六郷日枝社別当大力坊ではないかと考えるが、大力坊書上帖にはみえない。(6) 何れにしても鎌倉初期の使者僧即ち代官は六郷山在地の僧を命じた事は明らかである。このような「使者僧」は建保三年（一二一三）の文書には「本主御使僧」となり、承久三年（一二二一）には御使藤原と俗人になつているが、(7) これを下限として以後「御使」はなくなつている。

このように建久八年から承久三年の二四年間には使者僧という制度を有していた事が明らかであるが、その間に於ても「惣公文所」に命じて施行している事もある。例えば建仁二年（一二〇三）八月十日には夷石屋願成寺（板井妙見）僧観西が豊後香地庄長小野田畠を大力坊朝範に譲つた。これに対して九月、無動寺別当伝灯大法師が朝範に安堵の下文を出している（余瀬文書）この下文をうけて惣公文所が御下知を施行している。余瀬文書に

申給　（大力坊教円房）
　　僧朝範所
　　（大力坊観西）
　　可早任御下知旨領掌、長小乃安養房田畠事

右田畠任御下知旨、無他妨可令領掌状、如件、

元久三年四月廿六日

惣公文所上座大法師（花押）

などがある。朝範は六郷日枝社別当大力坊主であり、大力坊安養房観西の田畠を譲受け、無動寺より安堵されたのである。ところで、こゝにみる惣公文所は、上座大法師が施行しているのであるが、この場合の惣公文所は、「御使」をしているのである。この惣公文所上座大法師は無動寺の僧であろうか、それとも六郷山の僧であろうか、上座は三綱の初位であり、鎌倉初期の六郷山にあつても差支えはないのである。又御使が在地僧であつた事からすると上座大法師は六郷山僧とみてよいと考えられる。然らばこの法師の所属は何寺であつたらろうか。「六郷満山本山末山記」によると、黒土山木松房に当るわけであるが無動寺側の僧ともとれるし断定する事はできない。

建保三年（一二一五）三月には大力坊朝範は観西から長小野田畠を譲りうけ、無動寺別当の外題をうけ、ついで四月に本主御使僧範実は別当御房の下知により安堵している（余瀬文書）。承久三年（一二二一）十月には「御使藤原」が長小野山王薗三段の下作職を朝範に宛行つている（余瀬文書）。安貞二年（一二二八）には小寺主法師、権都維那大法師、都維那大法師、寺主大法師、権上座大法師、上座大法師、権別当大法師二、執行兼権別当大法師の九名の連署で、六郷山衆徒に将軍家祈禱を命じている。

この文書からすると六郷山の三綱ではなく、無動寺政所での所司であつたろうと考えられる。文永四年（一二六七）十二月日には別当が定妙に安堵の下知を下しているし、翌文永五年十月日には定妙を鏡覚の相論に対して別当が定妙に下知を賜つている（余瀬文書目録）。文永の役を前にした文永十年（一二七三）には六郷山両子、小山等にかゝる能然の訴えに対して延暦寺座主は能然を排して六郷山執行祐快に安堵している（余瀬文書）。

こゝには安貞以後と同じく御使の施行状はみえない。たゞ別の事件であるが、別当の下知を施行する財万なる者が現れてくる。建治二年（一二七五）十二月八日の文書が初見である（余瀬文書）。財万については嘉禎二年（一二七五）正月廿八日の惣領主良隆宛行状が初見の文書であり、建武五年（一三三八）六月十日の財万寄進状が下限であるが、これ等によると財万は六郷山領を知行しているが、一つの職名である。

弘安の役後、正和二年九州他社にみられない神領興行が宇佐宮にて行われる。六郷山には関係ないが、正和四年（一三一五

）六郷山夷長小野について範秀と幸益丸の相論が行われ、寺僧の間には安堵し難く領家叡山座主青蓮院に訴えたので四月廿三日令旨を下し、禅定房法印へ宛て安堵せしめるようにした。そこで別当法印は七月に範秀と幸益丸の新儀の非法停止を施行した（余瀬文書）。

この文書にみる範秀は古荘春徳丸である（古荘系図）。永仁二年の霊仙寺文書によると春徳丸は藤原となり、夷山霊仙寺院主であるから、幸益丸は夷長小野地頭職志賀氏であらうと考えられるが志賀系図にはみえない。安堵の令旨を施行した別当法印は禅定房法印であるから、六郷山日枝社別当ではないかとも考えられるが、別当書上帖にはみえない。従つてこの別当は無動寺別当であらう。

嘉暦二年（一三二七）六月十七日には別当下文の形で夷山内蓮祐払等を長祐に知行領掌せしめている（余瀬文書）。これをうけて権別当仁王丸は正和四年四月二七日の令旨の旨によつて長祐に蓮祐払その他の領主職を安堵している（余瀬文書）。

権別当仁王丸とはどんな人物であらうか、この文書によると「右長小野寺務管領事、被付于別当職之由、令旨拝領之間」とあり、相論の夷山院主職は古荘氏であり、権別当が現地の者であるとすれば処理に困難であるし、やはり無動寺側の人物であらう。

こうして南北朝に入ると別当からの文書は少なくなつているが、六郷山の一部は一時今まで全くみられない彦山の「霞」になつている。而も大力坊は北浦辺の代官職に任ぜられている（余瀬文書）。

このように鎌倉以後における六郷山の支配機構は延暦寺座主令旨又は政所下文をうけたり、無動寺別当が座主の令旨をうけ六郷山に下したり、単独に別当自身の下知により惣公文所、又は御使と称する代官が現地を支配する組織になつている。その場合御使は現地の僧に命じた。六郷山内での代官は何寺の僧が任ぜられたか当然代官に任ぜられるのは院主層である筈であるが明にするを得ない。たゞ承久三年（一二二一）の御使藤原は古荘重能弟某即ち智恩寺権別当法眼ではないかと疑われるが、このことについては後に触れたい。たゞ前にも述べたように御使は承久三年を下限として後にはこの制度はなくなり、殆んど

無動寺が宗山執行＝長安寺に命じて直接支配をしたようである。それは華頂要路にみる建保三年（一二一三）の慈円譲状や、正和二年十月十二日の永弘文書鎮西下知状によつてうかがわれる。正和の永弘文書によると、

此所者、天台無動寺別院為六郷山内、彼執行令知行之処

とある。別院は支院であり、天台内に於ては無動寺も支院であり、六郷山も無動寺と一体の機構であり、中世に於ては六郷山が無動寺の直接経営の「山」であつたのである。

(1) 拙稿「六郷山別当惣堂達職の成立」（豊日史学一三四号）

(2) 所司は三綱の事である。寺中の僧侶を統轄し、庶務弁理のための僧の官位で、上座、寺主、都維那の有職正三綱と己講、内供、阿闍梨の有職権三綱とがある。

(3) (1)に同じ、二九頁。

(4) 豊後高田市長安寺蔵「長安寺過去帖」

(5) 拙稿「六郷満山の歴史」（和歌森太郎博士編『くにさき』昭和三五年刊）二八二～三頁。

(6) 千福房は六郷日枝社書上帖にみえないので、夷山院主職か智恩寺院主職である可能性もある。智恩寺は別当、惣堂達の所在地で、平安時代六郷山を管理した所である。

(7) 御使藤原については、智恩寺の地位からおして古荘重能の弟某、智恩寺権別当法眼ではないかと疑われる。二年後の貞応二年大友能直は卒去の直前、横城山院主職等を庶子志賀能郷に譲つている。

(二) 六郷山総鎮守日枝社

(一) 勧請年次の考証

鎌倉初期の文書にみる如く六郷山在地の「御使」即ち代官職については、個々の人物を明にする事を得なかつた。しかし浮

び上つてくるものは智恩寺院主、夷山霊仙寺院主、又は六郷山日枝社別当などで、これらの僧が任ぜられたのではないかと疑われる節がある。何れにしても六郷山総廟鎮守日枝社の別当は大力坊であり、定額院主目録によると「院主根本院内大力坊」となつているので大力坊の地位が高いものであつた事が分るのである。

夷山（石屋）霊仙寺は豊後国香地庄間にある六郷山末山十ケ寺の本寺である(1)（仁安目録）。末山であるから二十八本寺の中では早く建立された寺院とは考えられない。而も末山のもつ機構は庶民と接する流通布教の任務に当る寺院であつて中心の寺院ではない。しかし霊仙寺は末山十ケ寺の代表寺院であつた事は明であるし、余瀬文書長承四年の文書によると早くより中山本寺の中に入れられている。（仁安の目録と矛盾するが）このような重要な寺院であつた事は事実である。

そこで霊仙寺と日枝社とは密接な関係を有しているので改めてこの寺院の機構を考えてみる必要がある。日枝社については前に多少触れたのであるが(2)、先づ鎮座の問題から触れて行こう。

日枝社は山王社といゝ霊仙寺から約三キロ許りの北夷にある鎮守で余り大きい神社ではない。田圃の中にあり、普通の村の鎮守と別に変りはない。日枝社縁起を余瀬文書「明治三年年三月国東郡長小野村、日枝社別当旧記書上帖」によつてみると、

嵯峨天皇之御代、弘仁十巳亥年始テ、六郷山惣廟ニ奉勧請、京都ヨリ別当トシテ一学将監重之ト申仁、始而当村里ニ鎮座ス、天長元迄勤行ス

とあり、又書出に「日枝社　別当妻帯大力坊」とあるので、大力坊はこの日枝社の別当坊であつた。又二世以下については

二世曲礼重春天長十迄勤行、三世同書重光貞観十六年迄勤行、四世浄善房義真元慶八年迄勤行、五世台観房賢昌延喜二十二年迄同、六世蓮光院豪順延長八年迄同、七世教学房慶了天徳四年迄同、八世実浄院教善長保五年迄同、九世曲膳祐澄長和三年迄同、十世観喜院豪安康平七年迄同、十一世浄観院豪弁嘉保二年迄同、十二世台明房賢孝永久三年迄同、十三世荘厳房経与大治五年迄同、十四世如浄房善賀久安三年迄同、十五世常善房観祐久寿二年迄同、十六世円浄房義厳仁安二年迄同（附箋）二男与左衛門分家夷「村長役」十七世教円房朝範建仁二年迄同、十八世安養房観勢元久二年迄同、十九世三郎安貞寛喜二年迄同、二十世護良房幸盛建長四年

迄同、二十一世礼宮代知友（紀カ）真弘安二年迄同、二十二世工藤次左近将監紀真重永仁三年迄同、二十三世上野法橋祐秀嘉元三年迄同、二十四世嫡子祐舜正和十四年迄同、二十五世嫡子祐増明徳四年迄同、〇下略

となつている。以上の史料によつて別当大力坊の概要が分るが、これにはいくつかの疑問がある。いうまでもなく日枝社は延暦寺の権現社であり、延暦寺と不二一体の社であるが、社が別当僧に支配されるというのは宮寺様式発生後のもので、大凡天長（八二四）以後である。その点三世迄僧でない事は正しい。然し、重之、重春、重光という名称は平安初期の名として果してどうであろうか。

又最澄が宇佐神宮寺に法華経を講じたというのは弘仁五年（八一四）であり、八幡大菩薩はこれを喜び、最澄に紫衣を賜り最澄は之に感激し、叡山の根本経蔵に大切に安置している。山門堂舎記（群書類従二四輯）に

根本経蔵在虚空蔵堂南

葺桧皮五門一面経蔵一宇、一切経律論、聖賢集幷唐本天台宗章疏、新寫経、伝記、外典、伝教大師平生資具、八幡給紫衣等安置之、〇下略

略このように叡山が宇佐宮を尊崇している時代に果して宇佐宮が日枝社を勧請したかどうか、こゝにも一つの問題点がある。弘仁十年勧請という年次は研究の余地があるのである。

次は定額院主目録（管内志収）によると「今夷石屋山王廿一社、院主根本院内大力坊」とある如く山王廿一社とあるが、山王廿一社になるのは権現信仰の完成期で、平安時代の終りである。叡山を中心として起り始めた権現信仰の思想が文献にみえるのが貞観元年（八五九）であり、権現の文字が始めて出るのが天暦四年（九四九）で、その頃から漸く権現信仰の交流が行われるようになるのである。[3] その点では弘仁の勧請というのはいさゝか早すぎる嫌いがある。

余瀬文書にはこの書上帖の外に「夷山長小野大力坊相伝系図」[4]が三通残つている。その三通の中、二通は書上帖にみる「一四世荘厳房経与久安三年迄同」より始り、一通は書上帖にみる「十五世常善房観祐久寿二年迄同」から始つている。鎌倉時代に

は書上帖と文書が案外よく合致するので、この書上帖も重要な参考資料になるのである。

以上日枝社の勧請について述べたが[5]、その年次については多くの問題をはらんでいるのである。ただ確実な事は六郷山が本家職を寄進した応保から仁安は絶対間違ないといえる。書上帖に当てゝみると十六世円浄房義厳の頃になる。通常の荘園管理は本所領家の鎮守を現地に勧請して、その責任者が代官になるからである。

そこで六郷山に日枝社を勧請したのを叡山側であるとすれば、何時頃であろうか。これ等の点について考察してみよう。第一の問題は大力坊が妻帯僧で紀姓である事[6]、これに関連して弥勒寺が石清水に本家職を寄進してから後に香地庄が弥勒寺領になつたのではないかという事である。もしそうであれば弥勒寺と石清水の関係によつて紀氏が国東に入つたことになる。宇佐宮を石清水に勧請した大安寺行教は紀氏であり、その年次は貞観元年(八五九)であつた。その行教も天台と関係を有するものの如く、紀氏と天台との関係の深さが知られるのである。弥勒寺と紀氏の関係は石清水と弥勒寺の関係によつて、寺領内に多くの紀氏が入つたと考えられる。弥勒寺が石清水領になるのは西岡虎之助氏[7]は長治二年(一一〇五)といゝ、石清水八幡宮史は大治三年(一一二八)であると云つている。然し、石清八幡別当元命が、弥勒寺講師職を兼帯したのは長保元年(九九九)である。かゝる点からすると、石清水と弥勒寺の関係もこの頃と考えられて然るべきである。然るに香地庄鎮守蓮法寺へ八幡宮は永延二年(九八八)に勧請されたと伝えられている[8](松成文書)。これを以てすれば香地庄は石清水寄進以前の弥勒寺領であり、石清水を通じての弥勒寺領であり、石清水に関係してくるのは十一世紀始めからである。試みに大力坊書上帖に当てゝみると、七世紀教学房慶了天徳四年迄同の次八世実浄院教善長保五年迄同の頃になるからである。石清水の関係での紀氏入国であれば、九世祐澄(長和三年=一〇一四)迄勤行の時代であらうか。六郷山の末山末寺の建立されるのも丁度この頃であらうと考えられる。従つて霊仙寺の建立後に日枝社が入つたとすれば、十一世紀の頃であり、もし書上帖が少しでも真実を伝えるものとすれば、日枝社勧請の地に霊仙寺が建立されたという事になる。

もし仮に十世紀以前弘仁に勧請されたとすれば神社伝播史上に新しいケースを拡するものであるが、一般的理論からすると

漸く最澄との関係を結ばんとする弥勒寺が、それ程早く日枝社を勧請できたかどうか疑問であるし、権現信仰の成立後の勧請であるとすれば、一一世紀始頃で九世祐澄を実在の人物とすればその頃であるという事になる。従つて霊仙寺建立の方が先であることになる。

然らば何故香地庄に日枝社が入つて来たかという点になると、海上交通の問題を考える必要があらう。国東半島の港は竹田津、伊美庄などがあるが香地庄も亦古来の海賊衆の根拠地(9)であつた。共に竹田津浦に早くから熊野海賊との関係が生れ早くから熊野権現が入つている。竹田津六所権現旧記（大分県史料一〇巻）によると天徳三年（九五九）に飛来した熊野権現と伝えている。(10)もしこれが史実に近い伝えであるとすれば、国東半島に入つた最も早い熊野権現であるが、権現の文字の初見が天暦四年（九四九）であるとすれば、これもいさゝか早すぎるので一〇世紀末と考えても、推定の日吉権現の入国より先になる。かゝる状況から熊野権現の入つてない香地庄を選んだものであらうと考える。

かくて私は六郷総廟日枝社は熊野信仰を避けて香地庄の港から入つて来たもので、やはり石清水八幡と弥勒寺の関係が密接になる十一世紀始めに入つたものと比定したいが、その経路については、伊美庄別宮八幡宮の行事をみる必要がある。同宮は一年一度の御神幸祭に周防国祝島に御神幸をしているが、祝島を経由して周防国室積との交通が行われていたものであらう。果せる哉室積は室積保であり石清水八幡宮田中坊領である。国東半島北辺部＝北浦辺が古来重要なる海上交通の門戸であつたのである。日吉権現の入国も、紀氏を通じこの経路で行われたものであらう。

(1) 夷山霊仙寺は仁安の目録では末山本寺になつているが、余瀬文書長承四年（一一三二）の夷住僧行源解文案によると、既に中山本寺に組み入れられている。中世史料、安貞、弘安には勿論中山分に入つている。応永三年と推定する余瀬文書四二号五の妙鏡坊笛塙譲状によると「豊後国六郷山中山夷谷内妙鏡払坊舎田畠山野等事」とある。

(2) 拙稿「六郷山別当惣堂達の成立」（豊日史学一三四号）

(3) 拙稿「権現信仰の交流」（宗教研究一七七号）一九六四年刊。

(4) 大分県史料二五巻余瀬文書。
(5) (2)に仝じ、二九～三〇頁。
(6) (5)に仝じ。
(7) 西岡虎之助「中古に於ける宇佐神人の活動」下の二（史林十三ノ四）昭和三。
(8) 大分県史料十巻。
(9) 香々地浦にも松成氏の如き海賊衆がいた。
(10) 国東半島に入る熊野信仰は竹田津が最も古いようである。その入つた経路も紀州から瀬戸内、特に安芸の大三島を経て竹田津に入つたものが、これが六郷山に受入られたであろうと考えられる。熊野石仏は美術史の立場から大三嶋の大山祇神社の大日仏との彫像上の類似性がある。同社の仏像は別当寺の本尊仏であつたわけである。この彫像上の問題の指摘は京都美大佐和隆研博士の指摘である。

(2) 六郷山日枝社の地位

このように日吉権現を背景に又石清水勢力を背景にもつた紀氏の勢力をもつていた日枝社別当の六郷山内での役割は、本家側の現地側の代官に任ぜられたものだと考えられるがそれを示す史料は残つていない。しかし平安以来の尨大な文書を残して来た大力坊をみる場合、この坊が一山本寺の一末院末坊と同様な地位であつたとは考えられない。既に紹介したように夷山院主根本院内大力坊という事をみても、他の末坊とは全く異つていた事を知らなければならぬし、又既に㈠別当職の交代で述べた如く、表でみても分る如く本所領家の文書をそのまゝ残している。例えば、延暦寺の朱印を紙面全部にみる別当伝灯大法師下文がみられ、而もその原本を伝えていたり（建仁二）、文永以後の文書でも、大力坊そのものに直接関係のない文書を有している。ことに青蓮院宮令旨は二通も伝えられ、その内容は六郷山執行長安寺祐快に対する安堵の令旨（文永十）があつたり範秀と幸益丸の相論、即ち夷山霊仙寺院主である範秀との相論に幸益丸の非法停止の令旨（正和四）を有したり、南北朝以後でも彦山の代官職に任ぜられたりしている事実は、日枝社別当が、六郷山別当になつたり、執行になつたりはしていないが、

領家叡山側と六郷山の現地側、即ち平安時代では、別当との間に鎌倉時代に於ては執行との間に立つて、領家側を代表する代官的地位を有していた事は明である。

その証としてあげられる一・二を示してみると、平安に支配した別当・惣堂達の居住地の来縄郷払井田（現豊後高田市払田）を調査しても現地は弥勒院といつているが、残している宗教的金石文は何物もない。同じように日枝社別当大力坊も亦坊跡に殆んど、何物も残していない。金石文を残さない事は、その機関が、宗教的機関でなくて、事務機関であつた事を物語つているのである。もう一つの問題は貞応に大友能直が夷長小野を能郷に譲つているが、恐らく幸秀が知行していたのであらう。夷長小野がかゝる領家側との重要な地位を有つていたからこゝに着目し、古荘氏によつて夷山院主職を獲得せしむるようにしたものであらう。

こうした日枝社別当も南北朝から特に室町に入ると非常に大きく変化して行く、即ち、建武元年香地庄地頭職を田原貞広が帯するや（竹田津田原文書）、やがて田原氏が在地領主化し、領家側が衰えるにつれて、経済的事務がなくなり、単なる宗教的関係のみが留つて行くのである。

(三) 六郷山執行職の成立

さて(一)に於て本家叡山と六郷山の関係をのべ、更に無動寺別当、惣公文所と六郷山日枝社の問題を追求したのであるが、六郷山自体の管理運営をみると、平安末時代に弥勒寺所司が別当としての管理組織は非常に稀薄になつて名目的になつて行くのである。勿論、満山を代表する形式的管理は東西別当及び惣堂達が当つていたので、宇佐八幡宮放生会等には、これが参加したのである。しかし実質的な六郷山の在地支配は執行職がそれに代つていくのである。

六郷宗山は鎌倉時代より中山本寺屋山長安寺がそれに当つた。従つて満山の事務の執行に長安寺の院主が当つた。引続き南北朝時代になると学頭所も長安寺が当り、戦国時代迄続くのである。執行職は建久三年から康永元年迄続いている。(1) 長安寺の

院坊は六ケ所あり、外に二十五ケ所を有しているが、[2] 院主は払持院が当り、長安寺の経営にあたつた。同寺過去帖によると、

六郷宗山屋山払持院八代分此方六郷山執行職是也

当山退転ノ砌ニ而山ヲ切開キ諸堂造営、種々什宝納、金紙金泥五部経等也、従此代

大阿闍梨法印　応仁宗山執行、寺務等相成、京都大内之産也、当山九年、住平原常泉坊江隠居、宝治元未九月八日八十九歳ニ而死去ス、大友義直(マヽ)公三十五町田畑地寄附、二十四石隠居料也

圓位法印二代　正治二申執行補任有之、京都大内産也、在任五十三年、建長七卯年七月廿三日死去ス、

祐快法印三代　建長四子年六郷執行補任有之、京都大内産、在任三十五年、建治二年三月十四日死ス、

幸尊印　四代　建治二子年ニ、六郷山執行補任有之、京都大内産、在任三年、弘安元寅死ス、十月八日

快圓秀法印五代　弘安元年ニ六郷山執行補任有之、大内産、在任六年、弘安六未五月十八日死去ス、

祐清法印六代　弘安七申年ニ六郷山執行補任有之、京産、在任二十三年、徳治元年隠居ス、延慶三戊正月三日死ス、

幸覚法印七代　徳治元年ニ六郷山執行有之、京ノ産、在任十九年、正中元子十二月四日死ス、

円増法印八代　正中二丑年ニ六郷山執行補任有之、京ノ産、在任十八年、康永元年殿(マヽ)京也、

となつている。つまり建久三年応仁が執行補任以来八代が鎌倉時代にみえるが、悉く京都の産になつているのをみても判るように、執行職は無動寺の補任であつたようである。

たゞ応仁については長安寺文書建長七の譲状によると十月六日に所職、所領を妻紀太子に譲つている事をみると、たゞ応仁のみの問題かも知れないが、執行職も妻帯僧であつたようである。それと過去帖では宝治元年（一二四七）に死去となつているが、譲状は建長七乙卯年（一二五五）に所領等を譲つているのをみると応仁の死去の年はそれ以後でなければならぬので八年の誤差がある。過去帖の誤であらう。

もう一つの問題は都甲系図[3]によると、惟家の孫僧円仁が六郷山執行として、永仁四年（一二九六）に他界とあるが、同過去

帖によると円仁の名がみえない。たゞ円位とあるのがその誤写かともみられるが、円位の死亡は建長七年（一二五五）になつているが、円仁の死は永仁四年（一二九六）で四一年の差があるので、別人とみなければならない。尚円仁の子円然も執行とあるが、その在任の年号は不明である。今一つ、瑠璃光寺文書によると「但斎円執行時代、栄幸先祖有天少得分、於自令契約之以来」とある如く鎌倉時代に「斎円」という執行があつたのである。何れにしてもこの三人は過去帖にはみえないのである。

過去帖の代数をそのまゝにして都甲文書にみる執行を間に入れると次の如くなる。

初代	大阿闍梨	応仁	建久三（一一九二）任		
二代	法	印	円位	正治二（一二〇〇）任	弘安七、執行見
三代	〃		祐快	建長四（一二五二）任	
四代	〃		幸尊	建治二（一二七六）任	弘安元（一二七八）死
五代	〃		快円	弘安元（一二七八）任	
六代	〃		祐清	弘安七（一二八四）任	徳治元（一三〇六）退
			円仁		永仁四（一二九六）死
			円然	嘉元四（一三〇六）見	
七代	法	印	幸覚	徳治元（一三〇六）任	正中元（一三二四）死
八代	〃		円増	正中二（一三二五）	康永元（一三四二）帰

即ち長安寺過去帖によれば執行八代があるが、都甲文書によると、六代と七代の十九年の間に円仁、円然の二人が入ることになるので、斎円を入れると一応十一代の執行がみられるわけである。勿論過去帖の誤りもあることは以上の点のみでも見出されるのであるが、重要な点としては、執行の殆んどが京都から来たのに対して、鎌倉末になると在地の有力地頭都甲氏から六郷山執行に二人も入つて行つたという事は、六郷山と武士勢力との関係がどのようになつて行くかをみなければならないこと

になつて来る。

(1) 長安寺過去帖によるもので実際にはその代数はもつと多い。

(2) 定額院主目録（管内者収）による。しかし実地調査によると二院十一坊がある。（拙稿「六郷満山の歴史」和歌森太郎博士くにさき二〜二〜三頁。

(3) 大分県史料九巻

(4) 〃　一〇巻

(四) 大友能直の侵入

今まで述べて来たように六郷山の支配機構や内部組織が中世に入ると著しく変化して来た。その最も大きな理由は、鎌倉御家人の侵入である。これは六郷山に限られた問題ではなく、全国各地の有力社寺に対する一般的傾向であるが、六郷山の場合それがどのような経過をとつて行くかを追つてみたい。

六郷山に武家勢力が侵入して行くようになつた初見史料は承久三年（一二二一）十月日の余瀬文書御使藤原某下作職宛文である。[1] 御使は領家無動寺の代官である。それまでの御使が僧であつた。例えば建保三年（一二一三）四月十九日の文書によると本主御使範実[2]は別当御房の下知即ち無動寺別当の下知によつて、六郷山日枝社別当大力坊の教円房朝範に長小野内安養房田畠を安堵している（余瀬文書）。それが八年後の承久三年（一二二一）十月には御使藤原某が長小野内の下作職を朝範に安堵している（余瀬文書）。この藤原某はどんな人物であろうか。

承久三年十月は承久の乱が終り、この月幕府は土御門上皇を土佐に遷し、一応戦後処理の終つた頃である。ところが、二年後の貞応二年（一二二三）十一月二日には豊後守護職大友能直は六郷山中山本寺横城山東光寺の院主職と香地荘夷長小野地頭職を末子仁王丸即ち志賀能郷に譲つている。ところで能直はこの年の十一月廿七日には京都で卒去しているので、死の直前で

あつたわけである。そんなわけで横城や夷の所職を能直が所有したのは少くともそれ以前であるが、その所職の領有はどのようにして行われたのであろうか。その第一は備後法眼幸秀との契約による譲渡(3)(志賀文書)、第二は代官として古荘氏が早く下向し国東郡にも早く手をつけたのではないかという事である。

第一の幸秀は山門の僧侶であり、阿南荘預所でその勢力も大分郡、国東郡に多くの所領を有していたようであり、先の文書にみえる「先日譲進候為七ケ所之類領、可被思食宛候」とある七ケ所の所領の中に国東郡横城院主職及び夷長小野が入つていたのではないかという事である。その第二は古荘重能の弟某は六郷山智恩寺権別当法眼であつた事(5)よりすると、重能は早く豊後に下向していたのではないかと考えられる事である。

何れにしても、能直は頼朝の庶子であるという事と、中原親能の九州に於ける権勢のあとをうけて、早くから在地権力者層の懐柔と、権力の相互交換によつて、六郷山にも勢力を延ばして来たわけである。このようにみると承久三年の藤原某は古荘重能又は弟某ではないかと考えられる。何れにしても大友一族の者である事にはまちがいないと考える。

ついで仁治二年(一二四一)八月十二日には六郷山本寺高山寺末富貴寺には広増なるものが、有名な笠塔婆を建てゝいるがこの広増については別に触れる事(6)にするが、修理料田を寄進した糸永昌重であらうと推定するので、大友氏とは関係がないと考えるが、康元二年(一二五七)八月二十五日には武蔵郷内にある末山末寺である杉山瑠璃光寺が焼亡し、院主母堂藤原太子が焼死している(7)が、この藤原も前記大友一族の女であらう。

更に下つて永仁三年(一二九五)十二月には末山本寺夷山院主藤原春徳丸は今井薬師堂の供料田を寄進しているが、この春徳丸は古荘重能の弟某で、智恩寺権別当の孫範秀(8)の孫であり、春徳丸はその幼名なのである。丁度この頃、都甲惟家の系図には六郷山執行職をしていて永仁四年に死し、その子円然も後六郷山執行職に任じている(都甲文書)。

以上不充ではあるが、鎌倉初期、六郷山にどのようにして武士、御家人が入つて行つたかをみたのであるが、これをまとめてみると承久乱を前後とする頃から守護職大友能直は、有力なる在地領主層と特殊な契約(9)によつて、他の各地の地頭職などと

共に六郷山の主として院主職を獲得した。他方古荘氏も代官として早く下向したらしく、国東半島にも勢力を延ばしている。勿論これに対して宇佐宮勢力もこの地方を等閑に附する事はできず、山領維持に参加しようとするが、(10)時勢の流は如何ともできず、大友氏の前には全く影をひそめ、古荘氏を中心とする一族は、智恩寺院主職、夷霊仙寺院主職と次々院主職を押領し、一山の支配権を獲得することによつて、この山のもつ宗教的権力と政治経済力を巧に拡充して行くのである。

かくて平安時代に築きあげたこの六郷山の宗教的権威を高め且それを使つていた宇佐宮弥勒寺はこの山から徐々に追われて行つて、大友氏がこれに代つて行くのである。宇佐八幡宮に遠い安岐、武蔵、香々地から入つて行つた大友氏は更に田染庄、田原別府、(11)来縄郷と宇佐八幡宮に接近してくる。これ等の大きな足かゝりになつたのが六郷山諸職の獲得であつたことはいうまでもない。

(1) 余瀬文書、大分県史料二五巻所収。

(2) 承久三年の御使がもし古荘氏であるとすれば、古荘重能弟某は範実である可能性は強い。智恩寺はもともと平安では、六郷山東西別当と関係の深い寺である。後の研究にまちたい。

(3) 貞応二年七月廿五日、編年大友史料三四四号。

(4) 仝上。

(5) 古荘系図（編年大友史料大友史料七一頁）

近藤能成
- 能直
- 重能
- 某
  - 智恩寺権別当法眼
  - 永範
    - 女姓分
    - 範秀
      - 春徳丸養公

(6) 拙稿「武士による六郷山領の押領」（豊日史学一三六号）

(7) 瑠璃光寺文書一号（大分県一〇巻、五七五号）
(8) (5)参照。
(9) 渡辺澄夫博士「豊後国大友氏の下向土着と嫡子単独相続制の問題」（大分県地方史二二五号昭三六年刊、特に九～一〇頁。
(10) 糸永昌重の寄進のみならず、富貴寺には、貞応二年五月には大宮司宇佐公仲も寄進している（到津文書）
(11) 田原別符地頭職は大友泰広が譲り受けたらしいが、年代が明らかでない、恐らく貞応の頃であろう。

(五) むすび ――武士に対する抵抗――

六郷山が叡山と固い結束を固めるようになつたのは建久に入つてからであつた。平安時代の余融綽々たる状況に対して、鎌倉以後の社会は一変した。ことに宇佐本宮が源平内乱に平家に味方し、源氏に敗れ、又承久乱に法皇方に味方して幕府に敗れ[1]こうした結果は宇佐八幡宮の荘園に多くの新補地頭を入れ、急激に衰えなければならなくなる。この結果は宇佐宮は近衛家、弥勒寺は石清水に結束を固めると共に神官社僧は武士化して自らを守らなければならなくなつて行く。

このように鎌倉時代になると宇佐宮、弥勒寺の荘園経営はだんだんと苦しくなる。今まで本宮が大きく六郷山の経営の母胎になつていたものが、六郷山まで考える余融を失つて行く。これが鎌倉時代の状況である。

こうなるとさすがの六郷山も宇佐本宮及び弥勒寺と離れて、より強力な比叡山の直接保護に移行して行かざるを得なくなる。しかし宇佐宮の援助が一度に切れて行くわけではない。例えば私の研究では富貴寺は長治二年（一一〇五）の頃大宮司宇佐公順の建立であろうと考えているが[2]、鎌倉時代に入つても祖先の後をうけて負応二年（一二二三）五月日には大宮司宇佐公仲は累代祈願所たる蕗浦阿弥陀寺に豊後田染庄内末久名の地を寄進して[3]、富貴寺の経営を保護しているし、宇佐神官糸永昌重も同庄糸永名内を寄進している[4]。これが免田として宇佐宮領に残つている。

しかし大極的には大友を始めとする鎌倉御家人に直接間接に対抗するために、前にもふれた如く応保に本家職を寄進し、更

に建久三年には領家職を契約し、無動寺別院になつたようである。こゝに六郷山は経済的にも宗教的にも一貫した支配形態が始まるのである。しかしそれ以前から豊後に勢力を畜えた由原八幡宮の幸秀の如く六郷山にもその勢力を扶植しているが、守護大友能直は猶子政策等で、これ等の地盤を吸収し、大友を中心とする武士は、院主職地頭職等の略奪をはかつている。これは経済的のみならず信仰の面からも大きい変化を与え、寺領の寄進、塔姿の建立などを通して武家勢力の滲透は著しいものがある。殊に本寺の院主職が妻帯僧であるために武士にとつては最も注目される存在であり、且又院主職をおさえる事により、本寺の塔中支配、地域社会の大衆を握ることができる。その為に御家人による住僧との特殊関係を結ぶことによつて山領の侵略を間接に行う場合もあつたようである。このようなわけで、六郷山と叡山の関係では、代官としての「御使僧」を六郷山の在地僧を使つていたが、承久三年（一二一五）十月には御使藤原とあるので恐らく古荘氏を使つたのであろうが、これを境にして以後は在地僧を使つていないのである。これは叡山が武士勢力の介入を防ぐための自衛手段であり、以後は直接に執行との直接関係によつて支配しているのである。

(1) 拙稿「内乱期の政権の及ぼす神社の動揺」（豊日史学一三二号）二七～三〇頁。

(2) 拙稿「豊後国富貴寺の建立」（日本歴史九〇号）一八～一九行、昭和三〇年。

(3) 到津文書二八号

(4) 富貴寺文書（大分県史料一〇巻）

六郷山の宗教儀礼

(一) 六郷山の信仰

六郷山の信仰は宇佐宮の八幡神更に平安になると八幡大菩薩、それに対して比呼神の神母人母＝人聞菩薩の信仰であることは既に論じた。[1] 従つて八幡の御許山に対して人聞の六郷山として人聞菩薩の信仰の総本山となるのが、この六郷山であつた幾多の変遷を経ながら六郷山の信仰は一は寺院であり、且は神社であり、人聞はいつか法身仏となり、又開祖としての性格を持つようになり、権現思想の発生と共に人聞菩薩即ちその前身である比呼神は、この神のもつ属性と共に神功皇后四所若宮と合体して六所として成立してくる。本地仏と権現という関係は、多くの寺院の本尊仏となり、時代色を帯びつゝ本尊仏に変化が生じてくるが、その権現には変化をもたないまゝ続いて行く。しかし平安末の熊野信仰の発展はやがて田染庄を中心に受容されると共に、熊野山胎蔵寺の発生、こゝに大きく六郷山の第二変革期が生じ、古代信仰の交代ということがみえるが、全面的改革には至らず、依然として人聞菩薩は続いて行くが、六郷山今熊野山の本地仏である石仏大日如来は、真言密教の影響をうけて修験的色彩が濃厚になつてくる。従つてそれまでの造仏者が木造仏、石造仏にしても人聞菩薩という開山仏であつたのに対して真妙如来という新しい如来仏として現われてくるのである。

このように六郷山の信仰は在地主義による原始信仰と仏教との融合により人聞菩薩の信仰から六所権現という天台教学に基づく信仰に変容し、更に又天台との関係は日枝社の勧請ともなつて現われるが、それの入つた夷山霊仙寺にしても全く日枝社が、霊仙寺の本地仏までは成長できずに、むしろ行政的に満山の守護神＝権現として存続するようになつたのである。

従つて六郷山の寺院の宗教行事は誠に復雑多岐に亘る内容を有するのである。それぞれの時代、即ち奈良期末期、平安初期、中期、末期、鎌倉時代と夫々異るのである。それを克明に明にする事はできないのであるが、たゞ幸にして鎌倉初期十三世紀初めに、領家無動寺政所が六郷山に将軍頼経、連署北条相模守時房の施主により、息災延命、寿命長遠の御願成就の巻数[2]

目録が伝つたが、これによつてこの信仰内容を知り、且又その宗教行事を知ることができる。同書によると鎌倉に至つても将軍家が西唯のこの山に祈願したという事が判り、この山のもつ宗教的権威が平安時代に如何に多きく西国を左右していたかをみることができる。

ことにこの文書の後書により、六郷山の本山、中山、末山のみならず、修験霊山の三山組織の機能を知らしめたことは既に指摘して来た所である。[3] 即ちこの文書によつて分析できる事柄を今一度述べれば、本山は学侶の山、中山は修業の山、末山は衆生済度の山であるという事は既に述べたが、更にこれを布衍すれば、後書の始めに、

右、於当山霊場、所致御祈禱、目録如比

とあるが、当山は六郷山であり、祈禱の内容については本山、中山、末山の寺院別に個々に亘つて、祈願の対象、行事、仏典をあげているが、ついで

仍顕密学侶者跪観音医王宝前、開講一乗妙典、増仏賢

こゝにみる顕密の学侶の顕は顕教であり、密は密教である。学侶は学問だけを専修する学僧である。六郷山では本山本寺の僧が学侶であつた。観音医王は観世音菩薩、薬師如来であるが、六郷山の本尊仏は三山二十八本寺分であると観音が一三ケ寺、薬師九ケ寺、弥陀四ケ寺、不動一ケ寺、文珠一ケ寺になつている。[4] これで明かである如く、六郷山の本地仏は薬師観音の信仰であり、あとは派生的に起つた信仰の流入である事が明である。観音と薬師の信仰は、宇佐八幡宮寺弥勒寺の薬師信仰と、宇佐比売神宮寺の観音信仰に起源をもつ事は明である。

薬師信仰と観音信仰をみると美術史の上からいつても薬師信仰の方が古い事はいうまでもない。薬師如来史料の初見は天武天皇の時代、天武八年（六八一）に薬師建立の発願がされているが、仏像としても、法隆寺金堂の像、法輪寺金堂の像が現存する如く飛鳥前期のものである。[5] この事からしても本邦における仏教信仰の中でも古い信仰である事が分るのである。

それに対して観音信仰は奈良時代前期に流行がみられ奈良時代後期になると十一面観音像の作例が著しく、奈良聖林寺、山

城観音寺、岐阜美江寺、奈良薬師寺、同大安寺などには等身又はそれ以上に大きい像が現存しているのをみても分る。

わが宇佐比売神宮寺、後の中津尾寺の本尊仏が観音像である事は、創建の史料と合せて、宇佐に入つた観音信仰と比売神信仰の混淆と合せて見逃すことのできないことであるが、この信仰が六郷山の法華経信仰と合せて当然の事といわなければならないのである。

このようにみると「観音医王宝前」の語は後に観音の信仰の方が六郷山に於ては強かつたことを意味するのである。一乗妙典はいうまでもなく、凡聖ともに同一仏果を得せしめる殊妙の経典の意で法華経の事である。観音、薬師の宝前に法華経を講じて仏賢を高めて行く事をいつているのである。これを行ずるのはいうまでもなく六郷山本山八ケ寺の仕事である。ついで

密教仏子者、堀八幡尊神、六所権現社壇、唱神呪備法味

とあるが、密教の仏子は、もともと中山を中心とする修験信仰で、こゝでは直接権現信仰をたかめるものであるが、六郷山に於ても薬師の垂迹八幡神や、観音の権現である比売神を中心とする六所権現に直接神呪を唱えることによつて法味を備えるというのであるが、六所権現は六郷満山寺院の鎮守として必ず鎮座している。本地仏に対する権現である。古い八幡神は六郷山には直接鎮座していないのであるが、六郷山で八幡神に法味を備うということは初期六郷山の開発が、奈良仏教に対する平安新仏教天台真言に対応し、平地の弥勒寺、中津尾寺が、山岳に登つて御許山、六郷山になつたのである。従つて御許山は宇佐宮の本宮になつたが、六郷山は比売神中心の本宮になつたわけでいわば広義には平地神宮寺に対して山岳神宮寺であつた事を示したものである。従つて八幡神に「備法味」ということは嘗て宇佐宮の山岳神宮寺であつた事を示した名残であつたのである。そしてこの修験の道場は中山分であつたことを意味する。

これに対して次に出る

初覚行者、学人聞菩薩旧行、巡礼一百余所岩窟

とあるが、こゝに初めて人聞菩薩の名が現れるが、こゝでは人聞菩薩は人間として扱われているが、こゝにみるようにこの行に

参加したというのは法蓮以下の四人の同行といわれる。私の言を以てすれば宇佐巫僧集団であるが、これがこの山獄修行の最初の人々とみられているのである。平安初期にみる能行等はこの旧行を開いたとしているが、私見を以ていわしむれば、能行等も人聞菩薩の法統をつぐ、人聞菩薩であつたことになり、比売神と、巫僧＝人聞との分離が行われるようになつたものである従つて旧行を学ぶ巡礼の直接の道は、能行等の開いた道の事であり、その巡礼の道は一百余ケ所の岩窟になつているが、六郷山寺院には必ず多くの祈禱岩窟を有していて、夫々に本尊仏が安置されているし、又はこの岩窟は神明になつている場合もあるのである。この道については既に述べたのでふれないことにする。これは末山の仕事である。

偏是兼三道

このように、六郷満山の三山組織が夫々、三山に関連して別個の機構を有しながら、且又全山＝満山（全部の寺院、神社、岩窟）に関連しあつた形で成立しているのであるが、これ等三方に対する満山衆徒の三分された機能が綜合されている事が、三道を兼ねる事であり、こゝの場合に於てはそれが将軍家の祈願の祈禱になつたのである。

(1) 拙稿「八幡信仰の二元的性格」―仁聞菩薩発生をめぐる史的研究―（宗教研究一四四号）昭和三〇年。
(2) この史料については、新たに鈴木昭英氏「六郷満山信仰資料」（大谷史学九号別冊）昭和三七年が報告されている。
(3) 拙稿「山獄修験の三山組織について」（宗教研究一七〇号）昭和三〇年。
(4) 拙稿「六郷満山の歴史」和歌森太郎編「くにさき」二七八頁。
(5) 佐和隆研博士「日本の仏像」至文堂。
(6) 拙稿「六郷山別当惣堂達の成立」（豊日史学一三四号）

(二) 鎌倉時代の法会

(1) 本山本寺分

以上鎌倉時代に至る迄の六郷山の信仰上の問題にふれて来たが、こうした六郷山には、この信仰上の上からどうした社会的活動をしたか、又六郷山がどんな法令を営んでいたかをみたい。鎌倉時代の法会を知る唯一の史料はやはり安貞二年五月の文書の分析を試みる以外に方法はない。この史料によつて法会をみる事にしたいが、史料は本山本寺の後山金剛寺より始めている。行事は本尊仏及祭神によつて大きく異つている。たゞ満山を通じて共通している面もある。今これを夫々の寺院について比較してみよう。たゞ祭神及本尊仏によつて異つているので本山本寺の寺院から列挙してみよう。

	(薬師)	(無量寿如来)	(千手観音)	(聖観音)		(薬師観音)		合計
	後山石屋	吉水寺	津波戸石屋	大折山	鞍懸石屋権現	高山寺	喜久山	智恩寺	
一日一夜、同九日観音経不断	正・六～八（正月会ヵ）	正月会正五	正月会正三	〃正五		正月八日会正八		正月会正五	六
廿七日、僧廿人転読大般若会		観音経三十三巻	長日観音経三十三	〃					四
一夏九句不断供会		〃 安居		〃				〃	四
九月一三～一五大念仏		二季彼岸 〃							二
法華三十講問答			法華八講八人						二
天台大師供 十一・廿四		〃 十一・廿四							二
仏名経 十二・廿三一夜		〃 十二・一八							二
季別曼陀羅供									一

薬師講　毎月八日	長日薬師経十二巻				薬師経十二		月並薬師講八	四
往生講　毎月一五日								一
長日初後夜入堂		日次初後入堂	日次 〃		日次 〃		日次 〃	五
(読)講読経典		〃	〃		〃		〃	
長日護摩一座								一
五節供	七節供			五節供(権現)	〃 (〃)			四
二・十一・初午 (権)二季祭				(権)二季祭	(権) 〃			三
		法華不断経 十・八 十・十	〃 十・十一 十・十三					二
	今始御祈禱	〃	〃		〃			四
			修八座問答講					一
		月並観音講 毎月十八	月並観音講 十八					二
(権)仁王経一座					仁王講(読)			二
(権)最勝王経一座								一
合計 一八	九	八	九	(権現ノミ)二	八		五	

の如くなつている。その外本山末寺として、伊田井社、間戸石屋、不動石屋、大日石屋、辻小野寺、大谷寺の七寺社があげられているが、伊田井社、間戸石屋は大折山末であり、不動石屋、大日石屋は馬城山末の如く、辻小野寺、大谷寺は後山末であ

つた。[1] しかるに夫々可成の法会を有しているので、七寺社は鎌倉初期には相当繁栄していたものであろう。

たゞ喜久山はその本尊仏をみると丈六阿弥陀如来、同不動尊、同大威徳とあるので伝乗寺関係寺院であろうが、法会については「種々勤等中絶云々」とあるので既に伝乗寺の焼亡が行われていて現在の堂舎の如き小堂舎に容仏として収容されていた事が考えられる。従つて本山本寺中最も早く、衰えて行つたのは伝乗寺である事が明になる。（喜久山については後に述べる）

その外鞍懸山神宮寺も既に亡び、たゞ鎮守のみとなつて、六所権現に二季の祭典と五節供を行うのみになつているが、この寺も早く衰び去つて行つた様子がうかゞわれるのである。この行事法会を件名のみで数えるのは不適当であるが、数に於ては後山一八、大折山九、吉水寺、祿波戸、高山寺の八がそれにつぎ、智恩寺の五、鞍懸、喜久山（伝乗寺）の零となつている。たゞ鞍懸山は六所権現のみが有しこれに祭礼が続けられるのみとなつている事は六郷山本寺の盛衰を知る貴重な史料である。鎌倉初期にその優勢を誇つたのは宇佐宮に近い後山金剛寺のみであつた事も明である。

これを八本寺中の行事法会の行われている寺の数によつてみると次の如くなつている。

法会種別	寺院数
正月会	六
長日初後夜入堂読誦経典	五
観音経不断又ハ三十三巻、薬師講又ハ薬師経十二巻、五節供（権現）今始御祈禱、一夏九旬安居又ハ不断供	四
二季祭（権）	三
大念仏又ハ二季彼岸、法華講又ハ八講、天台大師供、法華不断経、月並観音講、仏名経、仁王講	二
転読大般若会、曼陀羅供、往生講、長日護摩一座、八座問答講、最勝王経一座	一

このように行事法会をみると共通して行われたものとしては正月会である。而も日時がそれぞれ異つているのは本山分を順

次勤仕していた為であろうか。吉水寺を正月一日として八日が高山寺になつているのでこゝで終つたものであろう。たゞ後山の場合は正月六日より八日の三ケ夜とあり、行事名が管内志にみえないが、写本の時落したもので、正月会であろうと推定する。

ついで共通したものとしては「長日初後夜入堂読誦経典」であるが、毎日入堂経典の読誦にあたる事である。その外は寺院本尊仏によつて夫々、その経典も異にしているが、本尊仏が薬師である寺院後山、吉水、高山、智恩寺では薬師講、薬師経が又観音の場合は観音経が行われているし、又法華経に関係した法会は一般に多く行われている。

こうしてみると時代により可成りの変遷を経ている事をみるのである。例えば大念仏会がが後山と吉水山に行われているが恐らく藤原時代の浄土教の影響であろうし、又この二寺のみに天台大師供が行われている事も天台との関係が深くなつてからであろうと、後山の曼陀羅供なども熊野修験的色彩の濃くなつてからの法会であろう。(2)

(2) 中山本寺分

ついで中山本寺十ケ寺をとつてみると、最も目立つのは「惣山一屋山寺」という長安寺の位置である。これは明に建久三年に屋山長安寺に執行職を置かれ、無動寺が別当職を獲得してからの事であろうが、いづれにしても中世六郷山の中心は屋山を中心に運営されるようになつた事を物語るものである。そこで先づは中山本寺十ケ寺の法会を調べてみよう。

屋山寺（長安寺）	長石屋（天念寺）	黒土石屋（多聞寺）	小石屋山（無動寺）	大山石屋（応暦寺）	千灯山石屋（千灯寺）	両子仙（寺）（両子寺）	
正月会 一・一～三	〃 正・四～六	〃 正・四	〃 （正月会カ）正・六～八	〃 正・一五	〃（〃カ）正・二～四	〃 正・六～八	七
修二月会 二・一～三	〃 二・一～三		〃 二・一～三		〃 二・一～三		四

舎利会（舞楽） 二・一五							一
百座仁王会 正八			〃 毎一				二
大念仏 九・一三〜一五	〃 十一・一〜三						二
法華不断経 十・一八〜廿一	〃 十・廿八〜三〇		〃 十・廿三〜廿五		〃 十・廿五〜廿七	〃 十・二〜四	五
八座問答講	修問答講		修八座問答講 三		〃	修三十講問答	五
天台大師供 十一・廿四	〃 十一・廿四		〃 十一・廿四		大師供 十一・二四	〃 十一・廿四	五
曼陀羅供 季						季 〃	二
月並往生講 十五			往生講 一五			〃 毎一五	三
観音講 十八	〃 十八	〃 十八		〃 一八	〃 十八		五
初後入堂読誦経典	〃	〃	〃	〃	〃		六
	不動行法一座				不動講 廿八		二
宝前毎季一日転読大般若会	〃 十・五						二
季百座仁王会							一
夏九句不断供花	〃 七・一五			夏九句安居	夏九句不断経供米 七・一五		四

二季祭	権現 〃	権現 〃	権現 〃	(権現) 〃	(〃) 〃	(〃) 〃	七
五節供	権現 〃	権現 〃	権現 〃	(〃) 〃	(〃) 〃		六
法華問答講一座 月廿八							一
転流大般若経一部			〃 十・一五		一日 〃	一日 (権現) 〃 〃	四
法華八講							一
小立義十問							一
今始祈禱	(権現) 〃	権現 〃	権現 〃	権現 〃	(〃) 〃	〃	七
長日転読大般若一帙	(〃) 〃		(〃) 〃		(〃) 〃	〃 薬師供 千手供	五
仁王講一座	(〃) 〃				(〃) 〃	(〃) 〃	四
観音経三巻	〃 三十巻	権現 三十巻		権現 〃 三十三	(〃) 〃 三十三	(〃) 〃	六
	仏名経 十二・七		仏名会 十二・廿		〃 十二・廿四		三
	月例薬師講 八		〃 八		〃 毎・八	〃 毎・八	四
	薬師経十二巻					(権) 護摩供十二巻	二

二五	二〇	八)	一八	八	二〇	二〇	
		尼(権現)千手陀羅一三	一万巻心経会一	〃	毎一	〃 廿一	二
			(権)師(マヽ)経一二巻			一巻心経会一・三	三
			(〃)薬行法一座				一
				観世音不断経		〃	二
						尊勝陀羅尼 廿一	一
						最勝講	一
						(権)三巻 金剛般若経	一
						二〇	

以上の如く中山本寺は安貞二年の注進状によると中山本寺と末山本寺が入り乱れて来て本寺と末寺関係も乱れて来ている。即ち、中山分の中に夷石屋、西方寺、大岳寺社など末山本寺が入つたり[3]、末山の中に中山の両子寺が入つたりしている。かと思うと鉾子石屋や、滝本石屋の如く末山末寺が中山分に入つている。このように、平安末期に完成した六郷山本中末の序列が鎌倉に入ると全く乱れて来て、本来の姿が徐々に変貌を始めたのがこの時代の特長としてみられる[4]。例えば中山本寺の屋山長安寺が総山として、特別扱いされるようになつた事は、六郷山別当惣堂達職が実質的に支配権を失い、六郷山の領家が無動寺になつた結果を物語るものである。而して十ケ寺の中道脇寺、護国寺、東光寺の三ケ寺が既にみえない。

こういうように状況が変化した六郷山の法会関係、この場合は中山分、而も平安の序列に戻した場合の有様について分析を試みてみたいと考える。勿論安貞二年（一二二八）の文書によるのであるが、その法会の数をみると総山になつただけあり、然すがに屋山長安寺の二五が最高であり、長石屋山天念寺、補陀羅山千灯寺、足曳山両子寺の二〇がそれにつぎ、ついで小石屋山無動寺の一八、黒土山多聞寺と大岩屋山応暦寺の八になつている。

そしてこの大きな特長は権現に対する法会が寺院の法会と殆んど同様に扱われていることである。これは中山分の信仰が修験信仰であつた事を物語る重要な資料になるものである。

法会の数

寺名	数
長安寺	二五
天念寺	二〇
千灯寺	〃
両子寺	〃
無動寺	一八
多聞寺	八
応暦寺	〃

中山本寺七ケ寺の法会種別寺院数

法会種別	寺院数
正月会、二季祭（権現）今始祈禱（〃）	七
五節供（権現）観音経（権現）初後入堂読誦経典	六
法華不断経、修問答講、天台大師供、観音講、長日転読大般若一帙（権現）	五
修二月会、一夏九旬不断供花、転読大般若経一部、仁王講一座（権現）	四
月並薬師講月並往生講、仏名経（会）、一万巻心経会、薬師経十二巻	三
百座仁王会、大念仏、曼陀羅供、不動法一座、宝前一日転読、大般若会、千手陀羅尼卅三、観世音不断経	二
舎利会、百座仁王会（権現）法華問答講一座（〃）法華八講（〃）小立義十問（〃）薬行法（〃）尊勝陀羅尼、最勝講、金剛般若経三巻（〃）	一

以上の如く七ケ寺全部にある法会行事と、一部にある寺との比較であるが、正月会は全部の寺に行われている。この法会は現在も続いて行われている。「修正会」[5]と称しているが、文書にはその名はみえない。この正月会の最終日に鬼会行事があり現在では農耕儀礼とも結びついている。期日についてみると次の如くなつている。

中山本寺正月会日割表

一月一日	長安寺			
〃二〃	〃		千灯寺	
〃三〃	〃		〃	
〃四〃	天念寺	黒土多聞寺	〃	
〃五〃	〃			
〃六〃	〃	無動寺		両子寺
〃七〃		〃		〃
〃八〃		〃		〃
〃一五〃	応暦寺			

このように正月一日より一五日迄行われているが、一日の所は黒土多聞寺、大岩屋応暦寺であり、前者は四日、後者は一五日になつていて、他は全部三日間行つている。従つて鬼会を行つたのは三日目であることになる。ことに長安寺の場合には「鬼会田」[6]まであるので、可成りの経費をともなう行事であつたことが分る。

前にもふれた如く権現の祭りが中山分に於ては特に多く行われていることが目立つが、祭典は春秋二季に行われ今始祈禱というのが全部の寺に新に行われている。両子寺を除くと全部に五節供があり、又小石屋山無動寺を除く全部に観音経三十巻と

か三十三巻という法会がある。又長日転読大般若一帙も黒土石屋多聞寺と大石屋応暦寺の二ケ寺を除いて全部の寺鎮守六所権現に行われている。

その外本寺の方では初後入堂読誦経典、法華不断経、修問答講、天台大師供、観音講などは一般に多いが、ことに法華経に関連した法会の多いことが目立つている。又観音講の多いことも中山の本尊仏が観世音菩薩の多いことに由来しているのであろう。観音の中でも千手観音の多いことも特長であるが、観音信仰の面から仏像にあつてみれぼ、奈良時代の後期から十一面観音の作例が多くなり、平安時代にもそのまゝ続いているが、地方ではこの信仰は千手観音の信仰に移行して行つているのである。(7) かゝる意味でもわかる如く、中山の創立は平安中期に盛んになつた千手観音信仰を代表する寺院集団でもある。

しかし決して観音講だけではなく、七ケ寺中四ケ寺にあつた修二月会、一夏九旬不断供、転読大般若経一部、仁王講一座、月並薬師講というのもある。一夏九旬の行事は不断供だけではなく安居もある。これ等の法会行事について後に詳説することにしたい。

(3) 末山本寺分

最後に末山分についてみよう。既に述べた如く中山分に末山分が可成り入つている事は平安の序列が乱れて来たのであると示摘したが、安貞二年の目録の中には末山分として、両子寺と小城寺の二ケ寺になつているが、中山分に入つているものも含めて末山分本寺の行事法会をみる事にする。便宜的に末山分に入つたものを先にして、中山分に入つているものを次に入れることにする。

小城寺（宝名寺）	夷石屋（多仙寺）	西方寺（清浄光寺）	大嶽寺社（神宮寺）	岩殿石屋（岩戸寺）	寺院数
六観音	千手	延命観音	薬師 豊後鎮守	薬師	
（正月会カ）正・三～五	正月会 正・一～三	〃 正・五	〃 正・六～八		四
一日転読千巻観音経 正・一八～廿					一
修八座問答講	小立義修〃〃 僧八人	〃	〃 僧八		三
観音経三三巻 日次	〃				二
初後夜入堂読誦経典	〃	〃	〃		四
（権現）二季祭	（〃）〃	（〃）〃	（〃）〃		四
（〃）五節供	（〃）〃	（〃）〃	（〃）〃		四
（権）今始御祈禱	（〃）〃	（〃）〃	（〃）〃		四
（〃）長日仁王経一座	（〃）〃	（〃）仁王講一座			三
（〃）長日観音経三三		（〃）観音経三巻	〃		二
修二月会 二月一日～三			〃 二・一～三		二

二季彼岸大念仏	〃	念仏会	二
一夏九旬不断供花	〃	〃	三
一日転読大般若会 九・九 僧廿			一
三ケ夜法華不断経 七・一八九〜二〇		〃 一〇・一七〜一九	二
天台大師供 十一・廿四			一
仏名経 十二・廿五			一
月並観音講 一八	〃 一八		二
一〇〇万巻心経会 毎一日		〃 毎一日	二
最勝講一座			一
(権)長日転読大般若経			一
		舎利会 二・一五	一
		御霊会 十一・一三	一
		月並薬師講 八	一
		法華会 十一・二四	一

			(権) 妙見祭	一
			(〃) 薬師経十二巻	一
			(〃) 観音経三十三巻	一
		仁王講一座		一
一〇	一九	一〇	一八	

以上の如く末山分は安貞の目録に五ケ寺がみえるが、そのうち岩殿山（岩戸寺）は

年中勤季別月並長日ノ勤等有之(8)

のみにてその内容は全然不明であるので、結局は十ケ寺中四ケ寺のみしか不明である。鎮守六所権現を含めてその法会、行事の数をあげると、然すかに夷石屋の一九が最高であり、つぎ大獄山神宮寺の一八であり、小城山宝名寺及び西方山清浄光寺は一〇ケのみになつている。

今までみて来た如く、本山本寺、中山本寺と同様に同じ法会もあれぼ、本山、中山にないものもある。又法会行事が寺院の盛衰を物語るものであるから末山中の中心寺院は夷山であり、ついで大岳山であつた事も明になるが、既に五ケ寺が目録に戴つて来ないことは衰えたのか、それとも武士に押領されて行つたのか、今後の問題にしておきたい。さてこれを全寺にあつた法会からとつてみると次の如くなる。

末山本寺七ケ寺の法会種別寺院数

法会種別	寺院数
正月会、初後夜入堂読誦経典（権）二季祭（権）五節供（権）今始御祈禱	四
修八座問答講、仁王経一座（権）一夏九旬不断供花、観音経三三巻、〃（権）	三
修二月会、二季彼岸念仏会、三ケ夜法華不断経、月並観音講、一万巻心経会、薬師講（権を含む）	二
一日転読千巻観音経、〃大般若会、天台大師供、仏名経、最勝講一座、（権）長日転読大般若経、舎利会、御霊会法華会、（権）妙見祭、仁王講一座	一

※権は権現なり。

の如く正月会は依然として最も多く、ついで修八座問答講、仁王講、一夏九旬不断供花が多く、観音信仰と薬師信仰とで、本寺の本尊仏に多くの関連のある事は云うまでもない。無年号文書であるが鎌倉末とみられる余瀬文書夷山所領坪付には一夷山仏神御料田の中に一同正月朔日、同御檀供田三段があるが、それらは正月会の関係のものか、又同条「同六日鬼会御檀供田九段」がある。

(1) 拙稿「六郷満山の歴史」（和歌森太郎編くにさき）二八三頁、昭和三五年。

(2) 六郷山の修験は人聞菩薩でいわれる、法蓮等の法師集団の系統を引くもので、その歴史性に於いては最も古いものであると考えられる。

(3) 夷山霊仙寺が中山分に入つている事は、余瀬文書長承四年（一一三五）行源解文案に既にみられる。仁安三年（一一六八）の目録には末山本寺になつているので三三年のズレがあり問題を残しているが、安貞以後の鎌倉の文書によると中山本寺分に入つている。この事は霊仙寺の六郷山中における位置づけの問題から考えていろんな問題を含んでいる。一つは叡山との関係で、六郷山総廟日枝社を霊仙寺が管していて、古代交通が海上を使用した事、即ち周防室積より国東半島北部、即ち北浦部を利用した事などである。伊美八幡の渡海神事などそれ

を示している。又これは六郷山に入る熊野修験の伝播経路にも関係する。

熊野信仰の入つた経路について種々の問題があるが、今の段階としては今熊野山の大日如来の造像上の問題から大三島大山祇神社の別当寺の仏像によつて、熊野信仰は竹田津に入り竹田津に熊野六所権現を勧請したと考えられるが、これが六所権現と熊野権現の融合の始りであろうと考えられる。同社の神楽も大和舞系の神楽のようであるし、内海通航者の信仰をもつている点からも、このことが考えられるし、地理的状況からみても、ここの地勢と熊野新宮の状態はよく似ていて、那智に当る場所が千灯寺又は夷山霊仙寺に当たつている。かくて熊野の信仰は能行の峰入道を以つてすれば、北浦部の海岸線を経て、本山本寺高山寺のとりあげる所となつたものであろう。

竹田津権現の入つた年は同社旧記（竹田津三六八号文書）によると天徳三年（九五九）に入つたというが、権現の文字が初めて現われるのは天暦四年（九五〇）大神宮法華十講縁起であるから、いささか信じられないが、太郎天童の造立が大治五年（一一三〇）であるから、大日仏はそれ以前の作であると推定できる（理由について別項で触れる）。従つて熊野信仰の入つたのは十一世紀の頃であろう。何れにしても新文化を接収する半島の門戸になつた一つが霊仙寺であつた事に注目しなければならない。ここに末山分であつた霊仙寺が中山分に入る要因をみなければならない。

(4) これは修験霊山三山組織の機能を果させる為に、本寺の衰廃を調整する為に、組織の編成変を行なつたのである。

(5) 半田康夫氏「修正鬼会」（和歌森太郎博士編くにさき）昭和三五年。

(6) 屋山文書長享三年霜月三日屋山払田数注文案（大宰管内志所収）、鎌倉末と推定される余瀬家無年号文書夷山所領坪付によると「夷山仏神田御料田」の中に「（正月）同六日鬼会御檀供田九段、同饗料田三段」がある。

(7) 佐和隆研博士「日本の仏像」六六頁及び一四九頁。

(8) 太宰管内志、国崎郡下、千灯寺の項。

(三) 三山の法会

以上によつて本山、中山、末山本寺として安貞に残つていた古寺院の法会、行事が概観されたのであるが、更にこの法会の

三山における比較を試みてみる事にする。

本、中、末山法令別寺院数

※権は権現社の略

本中末山区分	調査対象の寺院総数	法会行事名	寺院数	寺院数	寺院数	合計				
本山	八ケ寺		本山	中山	末山	合計				
正月会			六	七	四	一七	転読大般若会、大般若経	一権	六含権	二	九
長日初後夜入堂読誦経典			五	六	四	一五	仏名経一	二権	三	一	六
観音経不断又ハ三十三巻			四権	六含権	四	一四	曼荼羅供	一	二		三
薬師講又ハ薬師経十二巻			〃月並	四含権	二	一〇	往生講	〃	三		四
五節供（権）			〃	六	四	一四	長日護摩一座（修）	〃			一
今始御祈禱（権）			〃	七	四	一五	八座問答講	〃	五	三	九
一夏九旬安居又ハ不断供花			〃	四	三	一一	仁王講	二権	四	一	七
大念仏又ハ二季彼岸			二	二	二	六	二季祭（権）	三	七	四	一四
法華八講又ハ卅講又ハ法華会			二八講	一	一	四	修二月会		四	二	六
天台大師供			〃	五	一	八	一万巻心経会		三	三	五
法華不断経			〃	五	二	九	百座仁王会		（含権）三	二	六
月並観音講			〃	五	二	九	不動行法一座		三		二
							薬師経十二巻		三		三
							千手陀羅尼三三		二		二
							観世音不断経		二		二
							舎利会		一	一	二
							法華問答講（権）				一

薬師行法（権）			一	一	一	一日転読十巻観音経				
尊勝陀羅尼						御霊会		一		
最勝講	一	一	（権）一	一	一	妙見祭（権）		一	一	一
金剛般若経						計	三六	二〇	三三	二四

このように六郷満山の全寺院本寺分の中鎌倉時代に入ると既に本山本寺八ケ寺の中八ケ寺が全部残つているが、既に焼亡その他により寺院の盛衰は可成りの開きを有し、それが同時に法会行事に反映し、本山本寺の中では後山金剛寺が中心となり、大折山報恩寺がこれにつぎ吉水山霊亀寺、津波戸山水月寺、西叡山高山寺がこれについでいる。

中山分も亦同様に十ケ寺の中三ケ寺が既にこの中から姿を消し、屋山長安寺が中心で、然も六郷山宗山になつているし、長石屋山天念寺、補陀葉山千灯寺、足曳山両子寺がこれにつぐという状況であり、末山本寺になると五ケ寺がみえるが、岩戸寺の法会内容がみえないので、夷山霊仙寺がその中心をなし、大嶽山神宮寺がこれについでいる状況である。

これ等の各寺院の変遷がみえる事は鎌倉に入ると大きく六郷山がゆれ始めている事を知る事ができるが、法会行事も政治経済的盛衰によつてゆれ始めたわけであるが、満山全体からすると本寺だけで三六種の法会行事が行われているのである。而もこの法会等も時代による多くの変遷を経ているわけであるが、鎌倉初期の状況であるだけに平安時代及び創建時の諸法会を含んでいる事はいうまでもない。

一瞥して分る通り、本、中末山本寺の状況をみると中山分に最も多く三三種の法会が行われ、末山分が二四種、本山分が一九種という数になつていて諸法会は鎌倉には中山分が中心となつて活動していたのである。これを三山共通して行われていた法会行事をみると一六種であり、本、中山共通にあるのが二種、中、末山に共通するものが六種である。本山のみものが長日護摩一座のみであり、中山のみのものが一〇種、末山のみのものが二種ある。これを表示すると次の如くなる。

三山法会種別数

図表(1)

本山	中山	末山	満山
一九	三三	二四	三六

三山本寺共通法会数

図表(2)

本・中・末山共通	本・中山共通	中・末山共通
一六	二	六

一山のみの独自の法会

図表(3)

本山	中山	末山	計
一	一〇	二	一三

こゝに六郷山が平安時代にも、三山各々独自の機能を有した如く、又鎌倉時代にも独自の発展をしているのである。

(四) 法会行事の来由

以上鎌倉時代における諸法会を概観したが、更にこの三六種の法会の中に主なる法会の来由について概説してみたい。

正月会は修正会(しゅじょうえ)とも呼ばれるもので、六郷山でのこの法会がいつ頃始つたかは明ではないが、もともとこの法会は神亀四年(七二七)正月に始つたという説がある。[1] この地方では宇佐宮に最も早く行われ、天平勝宝元年(七四九)正月三日に行われたという。[2] 勿論弥勒寺に於て行われたものであろうが、その後どのような発展を示したかは不明であるが、神亀四年に起つたとすればそれより二二年後に宇佐宮へ入つて来たという事になる。

もともとこの法会は後には各宗寺院に行われる年始の法会である。日時も一定していなくて、例えば東寺では金堂八日、御塔九日、二王堂一〇日、講堂二八日となつている。[3] 宇佐八幡宮は三日、六郷山では既に述べた通りである。而してこの内容も夜間の勤で、貴賤男女の「つゝしみ」のためであつたり、法務寺の如く伎芸を見せたり、[4] 浅草寺のように「鬼やらい」をしたのである。[5] 六郷山の修正会は最後の日に鬼会(おにお)と称する鬼やらいをする。浅草寺と同じ方式である。この鬼会の起源については、豊前(大分県)宇佐郡駅川町拝田に残る「鬼会」がこの六郷山の起源をなすもので、もともと宇佐に行われたものが、六郷に入つて行つたと解せられる。[6]

修二月会　というのがある。これは二月会のことで修二会と書き、「しゆうにゑ」又は「しゆにゑ」又「しゆじゑ」ともいわれる。修正会に対して二月に修せられる法会である。天竺では正月が日本や中国の二月に当るので、天竺の正月を賀する法会である有名なのは東大寺のお水取、興福寺の薪能で共に火の行事である。東大寺修二会は良弁の弟子実忠が霊感によつて天平勝宝四年（七五二）二月に観音像と羂索院（二月堂）に安置し一日より二七日、一一面悔過会を修したのに始るといわれる。現在は三月一日より二七日に修せられる。役僧を練行衆といい、前年の一二月一六日に点定され、二月二日から参籠し別火の精進をする。三月一日から行法に入り一二日深夜に若狭井より香水を汲む式があり、一二、一三、一四に練行衆が扮装して内陣で松明を振りながら走る達陀の行法がある。毎夜練行衆が上堂する時籠松明が点じられ、一二日夜は数も多くなり、偉観を呈するのである。[7]

このように東大寺二月堂の修二会が最も有名であるが、これは観音信仰にからむ行法であるといわれるが、[8]宇佐に入つたのは長徳三年（九九七）二月一日である。[9]六郷山に入つたのはそれ以後と考えられるが、中山分では屋山長安寺、長岩屋天念寺小岩屋山無動寺、補陀落山千灯寺の四ケ寺に行われ、何れも二月一日から三日迄の三日間行われているが、どのような形で行われたかは不明である。たゞ修正会の鬼会行事と「お水取り」が類似している点は既にふれた通りである。

長日初後夜入堂読誦経典　これは三山に共通し全寺に行われているが、長日とは長い日又は日を重ねるとある。初夜とは「昔時は夜半より朝までの称」とあるが、[10]長日又は初後夜に入堂して経典読誦をするのである。経典は寺院によつて夫々異つている場合もある。

観音経　はこの六郷山の信仰が奈良末から起つた観音信仰、とくに本尊仏をみても分るように本山分大折山報恩寺の聖観寺鞍懸山神宮寺の観音、水月寺及び本山末辻小野寺の十一面観音に対して中山分になると千手観音が多くなるが、十一面観音から千手観音に移行し、ことに十ケ寺中薬師三、観音七ケ寺という数になり、末山本寺になると薬師観音弥陀不動文珠と雑多な本尊仏を有している。このように本山分の薬師観音弥陀に対して最もはつきりしているのが中山分である。こうした本尊仏

で示している如く、六郷山の信仰は藥師信仰に始り、それ以上に観音信仰が強くなつている。[11] この本尊仏が示していることによつても、又六郷山が当初より天台文化の影響をうけているので、法華経や観音に対する信仰が深かつたので、観音経は極めて重要視されている。従つて月並観音講も中山末山に最も多いことも当然である。

法華八講　これに関連してくるが、法華八講、卅講、法華会等も本山二、中、末山各一になつているが、この法華八講とは法華経八巻を朝夕二巻ずつ四日間に亘つて講読供養する法会である。その創始は大和国石淵寺の勤操が延暦一五年（七九六）に創めたとされている。[12] この様には平安初期から行われるようになり、延喜天暦にその度を加え、藤原道長を代表する摂関時代に最隆盛期を迎えたであろうとされている。[13]

天台と八講の関係は最澄の本願により大同二年（八〇七）に門弟円澄ら七大徳が八講を行つているが、その後貴族の間に迎えられ、藤原忠平らの建立した法性寺では春秋二季の八講が催され、この八講は洛中の名物になつたのである。こうして八講について三十講も盛になつた。

要するに奈良時代に盛に行われた法華会が平安時代には天台を中心に、法華信仰がもつと発展して法華八講になり、更に卅講になつたのである。平安時代の八講の弘通は天台宗を基盤にするとみられている。[14]

さて六郷山に法華八講がいつ入つたかは史料に明でないが、宇佐八幡宮に入つたのは長和二（一〇一三）年であるから、[15] 恐らく宇佐弥勒寺の外延である六郷山にはそれ以後入つたものであろう。

藥師講　は藥師経十二巻などと関連するが、本寺並に六所権現にも供養され、本中末の三山に共通した大きい法会である。本尊仏にしても三山に各々三ケ寺ずつに安置されているし、弥勒寺の本尊仏と合せて、宇佐弥勒寺に深い関係をもち、最も早くこの信仰が基盤になつて六郷山が発展したものであろうことが考えられるが、この法会もいつ始つたかは分らないし、宇佐八幡にもみられない。

一夏九旬安居（あんご）**又は不断供花**　については先づ安居（あんご）からみなければならぬ。抑印度では釈尊出世前から行われたも

ので、雨期三ケ月間仏道修行の僧侶が一処に住んで穏坐道を行うたのに始り、我国でも永くこれが行われて来たが、夏九旬即ち三ケ月間僧侶が集会して経論を研究したので、夏安居又は夏と言つて来た法会がある。宇佐八幡には天平九年（七三七）に始つているが、[16]六郷山にいつ始つたかは不明であるが、最も早く始つた法会であろう。

大念仏・二季彼岸大念仏　とは群疑論に「大念者大声称仏、小念者小声称仏」とあり、又大方等大集月蔵経には「至心念仏（乃至）見仏、小念見小大念見大」とある。要するに大声にて仏名を称することをいうのであるが、融ら念仏宗では融通念仏を修する法会を大念仏といつている。

念仏は恐らく阿弥陀信仰と連つていると考える。即ち防弥陀如来の浄土を信仰する仏教即ち浄土教に関連している。これに関する経典は既に飛鳥末期に輸入され講ぜられたが、この信仰によつて造像され始めたのは奈良前期であり、後期にはかなり盛であつた。平安に入り、天台、真言の密教が盛になるにつれて弥陀信仰はかくれてしまつた。それは亡びたのではない。

貴族に迎えられたのは十世紀宇多・醍醐天皇の頃からといわれ、仁和寺や延暦寺には西常行堂が建立され弥陀三尊像が造立されている。しかしこの信仰の流行という点からすると、空也上人（九八三頃の人）の念仏、源信による往生要集（九八五著）、慶滋保胤の日本極楽記（九八三著）などは忘れてならない史料である。

少し繁ではあるが平安の阿弥陀如来像について云えば、殆んど坐像形式であり、丈六仏が阿弥陀堂内に安置されるという形が多くなつてくる。丈六阿弥陀像の代表作は宇治平等院、京都金剛院、同法界寺の像である。

わが宇佐では八幡宮境内の大江匡房による三味堂の阿弥陀如来（現存せず）、[17]馬城山伝乗寺の阿弥陀如来で、これは現存する丈六如来像である。伝承には富貴寺の阿弥陀堂と共に同時代に建立されたといわれる。富貴寺は高山寺末でその建立は私の説によると長治（一一〇四～五）年間であるから、匡房の三味堂の康和（一〇九九～一一〇三）年中の後であるが、馬城山伝乗寺は本山本寺であるから少くとも富貴寺よりわづかでも古くなければならない。従つて十一世紀の終頃とみるべきである。

更に宇佐と陀陀信仰についてはもう一つ、空也についての問題をみなければならない。即ち空也は天徳二（九五八）年豊前

宇佐八幡宮に参籠し、その境内郷に酒井、辛嶋氏の勢力圏内に芝原喜光寺を建立したと伝えている。而も伝によると空也は豊後速見郡、国東郡を廻り寺院を起し、又盛に「楽」を興し、六郷山寺院には「ガクニハ」なる地名を残しているものが頗る多い。（嘗ては宇佐八幡宮にもこの「念仏楽」が伝わつていたが昭和に消滅している。）

（注）空也は応和三（九六三）年八月に万灯会を行なつているが、宇佐では天喜（一〇五三）年中に行なつている。

このようにみると、宇佐八幡本地仏を阿弥陀にしたのは、この頃であろうし。宇佐と阿弥陀信仰の関係は少くとも十世紀から始つていることになる。従つて六郷山に十一世紀に弥陀信仰が入つて来てもおかしくないのであるが、この大念仏については宇佐宮にはないので六郷山に始つたのであろうが、その史料はない。しかし以上の事から推して十一世紀末か十二世紀初期に始つたとみても大きい誤はあるまいと考える。

往生講　これに関連した法会に本山、中山にしかない往生講がある。毎月十五日に行われている。いうまでもなく、往生とは念仏行者が阿弥陀仏の願力により、安楽浄土に往き生きることをいうのであるから、浄土門の講読法会であり、大念仏に関連していると考える。

仏名経　大念仏に関係した法会としてもう一つ仏名経がある。これも本、中、末山に共通して多く行われた法会であるが、仏名とは仏陀の名号である南無阿陀仏、南無釈迦牟尼仏等の御名の事であり、この法会が仏名会又は仏名懺悔であり、朝廷及び諸国では毎年十二月一五日より一七日迄、後には十九日より二一日迄三ケ夜、更に後には一夜のみになるが、その間に過去現在、未来の三千仏の名号を称念して罪障を懺悔する法会である。

六郷山の仏名経は、本山本寺金剛寺の場合は仏名経一夜とあり十二月廿二日に行つているし、本山本寺吉水寺は十二月十八日に行つている。中山本寺天念寺は仏名経として十二月七日、仝無動寺は仏名会として十二月廿日、仝千灯寺は「仏名」とのみあり、十二月二十四日に行つているし、末山本寺霊仙寺は仏名経として十二月廿五日に行つている。これを表示してみると次の如くなる。

仏名経又ハ仏名会の寺院別執行日

月日	本山寺院	中山寺院	末山寺院	寺院数
十二月（十脱カ）七日		天念寺		一
〃 一八〃	吉水寺			一
〃 一九〃				〇
〃 二〇〃		無動寺		一
〃 二一〃				〇
〃 二二〃	金剛寺			一
〃 二三〃				〇
〃 二四〃		千灯寺		一
〃 二五〃			霊仙寺	一

これによつてみると、六郷山の仏名経は仏名会ともいわれ、その法会の日は十二月十七日より二五日の間に一夜行つている事が分る。そこで六郷山の仏名経は仏名会であり、一九日より三日間の行事が簡略化されて一日になつたもので、仏名経そのものではなしに本質は仏名会であつたのである。嘗ては十二月一五日より三日間一七日迄の行事であつたものが後に変化したもので、朝廷、諸国に行われたものゝ遺習であることが判明する。

天台大師供　は六郷山三山ともに共通した法会であるが、天台大師は天台智者と同義であり智顗を指す、天台山を棲身入寂の地とせられているので、この名がある。大師は有徳の法師を名づける尊号であり、智者大師とは隋の煬帝が地持戒品の文により師に与えた徳号である。ここでいう天台山は台州にある名山で、この山の麓に修禅寺、中腹に国清寺、頂上に禅林寺があり、これを天台三寺といい、比叡山は日本天台山又は天台山と名づけらたものである。(18) これを擬して比叡山三塔が生れたので

あろう。六郷山を三山に区分したのもこの影響で、本山を頂上、中山を中腹、末山を麓に擬したものである。

天台大師は天台智者であるが、諱は智顗、字は德安、姓は陳氏、潁川の人である。七才の時普聞品を授かり、十八才の時出家し、二二才（天嘉元―AD五六〇―年）慧思禪師に謁し、法華経し妙法に通じ、陳大建七（五七五）年九月に初めて天台に入り、陳文皇帝、皇太子等に仏法を講じ、隋の煬帝に薩戒を授け智者といわれ智者大師の尊称が始つた。ここ天台山の寺塔に努め開皇一七（五九七）年十一月に入滅した。

六郷山天台大師供は十一月廿四日に行われているが、この智者大師の法会を営んだのである。いつ頃から行われたかは不明であるが、伝教大師以後、この山に法華経を中心とする天台教学を如何に積極的に究められたかはこの法会行事をみても十分知る事ができるのである。

転読大般若会・大般若経　これは大般若経を転読する法会である。もともと大般若経は「大般若波羅蜜多経」の略語であり玄奘三蔵が訳し六百巻であり、一六のスートラを合集したものである。この経典の極要は一切皆空の浄義を開説し、諸有の執着を遣蕩するというのが特長である。大般若会はこの経をもととする法会であるが、現在も六郷寺院に、六百巻の寫本を有する寺が多いので長く続いて来たことを知る。(19)

六郷山に大般若会がいつ頃始つたかについては分らぬが、更にこの法会に関連深い法会に一万巻心経会がある。

一万巻心経会　この法会は般若心経一万巻を誦唱する法会であるが、集会する者の数の倍数をとる事が普通行われたようである。般若心経とは、正しくは梵漢合成の摩訶般若波羅蜜多心経であり、般若心経又は心経と略称されている。顕教では大般若経の要を萃めたものとし、密教では般若菩薩の内証三昧を説いたものとされているが、始め羅什が訳し後に玄奘が再訳したが、今は後者を用いている。法会の意とする所は大般若経の深意と全く同様である。

曼荼羅供　六郷山中本山分一、中山分二にある。曼荼羅（Mandala）は輪円具足という意である。「大日経疏」第四に「曼荼羅是輪円之義」とある。又、「曼荼羅者名為聚集、今以如来真実功徳、集在一処、十万世界微塵数差別、智印輪円輻湊、

翼輔大日心王、使一切衆生普門進趣、是故説為曼多羅也」とある如く、如来の功徳を一処に集め、円満にして、欠けた点のないもので、一般に一具の法門を図画に表している、真言に胎蔵、金剛の二曼荼羅があり、修験密教によく用いられた。

六郷山の曼荼羅供養は本山後山金剛寺、中山屋山長安寺、足曳山両子寺の三ケ寺で行われ、何れも四季に一度宛行われた。六郷中最も有名なのは、今熊野山胎蔵寺の大日石屋の石仏大日如来の上部にみえる曼荼羅であり、金、胎両部の曼荼羅の外に真中にもう一つ不明の曼荼羅がある。胎蔵寺は高山寺か伝乗寺の末寺であるが、大日如来は明らかに修験道に関係あるものであり、胎蔵寺がその鎮守として熊野権現を勧請した事は、この山の修験史上に貴重な資料であるのみならず、学界の問題を残している。一説として真中の曼荼羅は不動曼荼羅で、金、胎両部の統一をしようとしたのではないかという見方もある。(20)

いずれにしても熊野石仏の曼荼羅の示しているものは熊野修験化の象徴であろうと考えられるが、その事は六郷山全体の曼荼羅供に大きな関係のあることは云うまでもない。而もその曼荼羅供の行われている寺は本山金剛寺と中山、長安寺、及び両子寺である点は中山の性格が修験寺院である事、後山金剛寺は峯入の出発点であり、長安寺、両子寺は修行寺院の中心である点、信仰に新しい段階を迎えた事を意味している。

更に不動曼荼羅ではないかという点に於ては、胎蔵寺本寺の伝乗寺に藤原時代の丈六の不動明王が安置されている事、又長安寺鎮守六所権現には太郎天童が造像された事、而も太郎天童の造像の意味が、不動法に由来している事、即ち不動法によつて山岳の精霊を修験の象徴にしようとした点は、熊野石仏の造像との間に無関係にはあり得ない。いいかえると、金胎両部の統一を太郎天童という天童信仰と不動信仰との信仰的融合によつて、他の修験道の山岳にみられない新しい修験神とも考えられる、太郎天なる偶像を表出した点に、この山の修験信仰の独自性を強調した点がみられるのである。

即ち六郷山の信仰には、始め薬師・観音の信仰しかみられなかつたが、そこに新しい熊野修験の流入の問題がありその新しい信仰形態をこの六郷山で如何に消化し、これを六郷山個有のものにしようかという、六郷山巫僧集団の研究の絡果が新しく不動信仰を起した、ここに、今熊野山胎蔵寺の建立となつて現れるが、その思想の表出が、他に類例をみないという不動曼荼

羅に近い種子曼荼羅となつて現れたもので、それ等の不動信仰六郷個有信仰の結晶が、長安寺太郎天童となつたものではあるまいか。

ここにみる六郷山曼荼羅供養が本・中山三ケ寺のみに有した事の意味は、この様に解すべきではあるまいかと考える。六郷山の三六種の法会から考えて、この供養の起源は他の三山共通の儀礼と異なり平安中期以後のものであり、個有の宗教儀礼ではない。従つて六郷山熊野曼荼羅の彫刻年代を比定する重要な資料に太郎天童の胎内銘が考えられる。而してその造像銘は大治五年（一一三〇）二月十五日であるから、(21) 今熊野大日如来の曼陀羅はそれ以前のものであろうという事がいえるのではあるまいか。

不動行法一座　かくてこの曼荼羅に関連して、中山本寺天念寺の不動行法一座と、中山本寺千灯寺の不動講が問題になる。千灯寺は毎月廿八日に行い、天念寺の方は月日は明らかでない。

不動は不動尊と同じく不動明王のことである。この明王は密教の五大明王の一つである。五大明王とは不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉である。不動は忿怒の相を現じて、外道、悪魔を降伏する明王である。大日経に「為息一切障故、住火王三昧、説此大摧障聖者不動主真言」とある。このように不動明王は大日如来の化身で五大明王の中央尊に位し、青黒の色彩を有し、大火焔の中で大忿怒の相を現し、磐石座上にあり、右手に利剣、左手に絹索をもつている。即ち火焔は煩悩を焼く大悲徳を表し、利剣は貪慾、瞋恚、愚癡の三毒を倒す智慧を表し、絹索は難伏者を縛する三昧を表すとされている。

ここでいう不動行法とは不動法であり、不動尊を本尊とする行法即ち不動の供養法の意であり、不動講は不動尊の功徳を説く講座である。その差異を明らかにし得ないが、恐らく同じような供養をしたものであろう。本山本寺伝乗寺の不動明王は安貞二年の目録によると、

本山分一喜久山本尊丈六、皆色阿陀如来、丈六ノ不動尊、同大威徳、種々勤寺中絶云々

とあり、諸像は伝乗寺の本尊仏ではなしに喜久山十恩寺の本尊仏になつている。即ち伝乗寺は安貞二年には既に廃寺になつて

いるのである。聞山十恩寺と伝乗寺は別個の寺院であるが、院主は伝乗寺の徒とある[22]により、その末寺であつたという事である。又安貞二年の文書によると慈恩寺は「本山分末寺稲積山慈恩寺云々」とあり、更に院主目録には「稲積山観世音寺院主伝乗寺ノ徒也」とあることよりすれば、慈恩寺と観世音寺は同一寺院で始め慈恩寺といつたのが、後に観世音寺になつたようでもあるが、十恩寺と慈恩寺は同一寺院かも知れない。

このように伝乗寺の仏像は聞山十恩寺と稲積山慈恩寺を末寺にもつている事が明らかになるが、六郷山縁記[23]によると稲積の不動とあり、管内者はこの慈恩寺の次に胎蔵寺不動尊の史料を収めてあるが、本尊が不動尊であつたからであろう。然うすると伝乗寺に現有する丈六の不動尊像は稲積山慈恩寺の本尊像であつたものが、廃寺になつた為に伝乗寺堂舎に密仏として入つて来たものであり、又大威徳明王像も実は聞山十恩寺の本尊であつたものが、伝乗寺本堂に入つて来たものではあるまいか。然る時は伝乗寺本寺の本尊仏が阿弥陀如来像であつたという事になる。

六郷山本来の信仰基盤の中に他の信仰が入つた場合は本山末になつている場合が多い点よりすれば、この推定は必ずしも的を外れてないと考える。このようにみてくると、六郷山に不動信仰が入つて来たのは平安後期でなければならない。而も平安の不動の像の中でも立像は少いが、平安後期のものであろうことが推定される。かくて伝乗寺末の胎蔵寺の不動もこの頃を示す彫刻であろうことが考えられる。それは熊野修験が長安寺に入る前段階に伝乗寺との関係が生れ、更に発展して独自の六郷修験の成立を象徴する像として長安寺の太郎天童像に完成したものであろうと考えられる。

鎌倉中期以後になると不動信仰は著しく盛んになり、弘安七年の異国降伏の祈禱には、参加の全寺院が七ケ日の不動行法を毎月勤修している。これによつてみても、この山での不動信仰は本来のものでなく、平安末から鎌倉にかけて盛になつた信仰であつたという事がみられる。[24]

仁王会　安貞の目録には「百座仁王会」が中山本寺二、末山本寺二と四ケ寺で行われている。仁王会（にんのうゑ）は鎮護国家の為に「仁王般若経」を講説する講会である。仁王経を講讃する時は普通仁王講といい、仁王経を修する時は他の講会と

体裁を異にして、一百の講座を設けるのが定式である。そこで「百座仁王講」と通称しているが、ここでは百座仁王会と読んでいるが、同内容の事柄であろう。

仁王経は正式には「仁王護国般若波羅蜜経」であり、羅什三蔵の訳した経典であるが、その内容は序品より嘱累品に至る八品によつてできている。その意とするところは、仁徳ある帝王が般若波羅蜜を受持し、法により道を行ずれば、万民適楽国土安穏であるという事である。

この経典の説講が仁王会であるわけである。

千手陀羅尼　千手とは千手観世音菩薩を略した語である。千手観音は六観音の一つで、同時に無限の働きのできるという観音で、この観音は地獄道の障を破る菩薩であるとされている。千手陀羅尼は千手観音の真言と同じことで、その出所は千手経＝千手陀羅尼経＝千手千眼広大円満無礙大悲心陀羅尼経である。この法会は以上千手観音の法会で、六郷山の観音信仰に引いた法会である。

尊勝陀羅尼　尊勝は仏頂尊勝陀羅尼経の略であり、尊勝陀羅尼はこの経典第一巻にある神咒である。この陀羅尼は、仏陀が帝釈天に説いた法で、一切の悪道を浄め、生死の苦悩を除き、念誦憶持すれば、増寿・利福を得るといわれている。

六郷山では中山に一ケ寺しかない点をみると余り盛んな法会ではなかつたのである。

最勝講　最勝は最勝王経又は金光明最勝王経の略、金光明経は曇無讖の訳にかかる経典で四巻一八品からできていて、わが国では奈良朝以後講説された。法華経、仁王経と共に護国の三部といわれ、奈良時代には宇佐八幡にも、朝廷から奉納されているので、八幡宮には関係の深い経典である。宮中でも清涼殿では毎年五月に五日間講ぜられ、これを最勝講と称していた。

六郷山に本・中・末山本寺に一ケ寺づつ、鎌倉初期までこの法会のあつたことは、六郷山と宇佐宮の関係を物語る貴重な資料で、恐らくこの法会は可成り古くから伝つたものではあるまいかと考える。

金剛般若経　金剛とは梵語の Vajra で、金の中の最剛なるものの意である。金剛般若経は略して金剛経ともいわれるが、

正しくは金剛波羅蜜多経である、羅什の訳にかかる経典である。

般若とは智であり、真常清浄で不変不移で煩悩も乱すことができず、悪魔も動かすことができないのを金剛にたとえ、般若の妙用によつて惑者を断ち、空を照し、苦厄を除くことができるというのである。

宇佐八幡にも六郷山にも珍しい法会であるが、六郷山中山本寺に一ケ寺だけこの法会があつたのである。

長日護摩一座　護摩とは梵語のHomaである。大日経疏一五によると「護摩是焼義也、由護摩能焼除諸業」とある如く、諸の業を焼除くという意である。真言宗では道場の本尊の前に護摩壇を設けて護摩の行法を行う。護摩には、息災護摩、増益護摩、降伏護摩、鉤召護摩、敬愛護摩の五種があり、夫々目的によつて行法、修法も異つている。

又護摩の種別には内護摩、外護摩に分ける場合もある。この修法の起源は古代印度より伝わつて来た火天 Agni 祭祀の行法が仏教化して伝つたものであるとされている。

六郷山で護摩の法会は安貞二年の目録によると、本山本寺後山金剛寺に行われただけで、他の寺院にはみえない。宇佐御許山には頂上の霊山寺に護摩堂があつたことが託宣集にみえる。宇佐八幡弥勒寺中津尼寺は天台真言の兼修であつたので護摩供も伝つたのであろう。後山は御許山弥勒寺に最も近い封戸郷にあるためにこの行法が伝わつたのであろうか。

舎利会　舎利は梵語設利羅 Sarira で骨身又は霊骨と訳している。釈尊入滅後遺された骨分を仏舎利といつている。その質は堅く、戒・定・慧によつてできていて、得難いものであるとされている。法苑珠林によると、骨舎利、髪舎利、肉舎利の三種があり、各々白黒赤の色彩をもつといわれている。この舎利を供養する法会を、舎利講又は舎利会という。

日本における舎利会の起源は、伝教大師が入唐して帰る時、仏舎利を伝来し叡山に安置し、叡山に貞観二年（八六〇）から創められたという。六郷山の舎利会は中・末山本寺に一ケ寺苑二ケ寺に安貞迄行われていたようである。弥勒寺にはみられない法会であるから、鎌倉初期か平安末期に行われたものであろう。

(1)　東宝記（続々群書類従一二）東寺の果宝が観応三年（一三五一）に編纂したもの。滝善成「修正会」（日本歴史大辞典）

(2) 拙稿「神社における宗教儀礼―八幡宇佐宮行幸会の構造―」（宗教研究一三三号）昭和二七年。
(3) 三宝絵詞（伝記叢書、大日本仏教全書一一一）
(4) 釈氏往来（群書類徒九）正月十二日法橋某書状。
(5) 滝善成「修正会」(1)に同じ。
(6) 拙稿「六郷山別当惣堂達の成立」（豊日史学一三四号）
(7) 永嶋福太郎氏「修二会」日本歴史大辞典、一〇巻一〇六頁。
(8) 同　上
(9) 永弘文書、拙稿、前記(2)に同じ。
(10) 金沢庄三郎博士編「広辞林」
(11) 拙稿「六郷満山の歴史」（和歌森太郎博士編くにさき）二七八頁表。
(12) 元亨釈書第二慧解。
(13) 桜井徳太郎博士「仏教的講の成立と展開―法華八講と公家社会―」四四三頁。
(14) 同上四四五頁。
(15) (2)に同じ。
(16) 到津家記録には天平九年四月七日御託宣によつて始つている。同注進状に「建立伽藍奉安慈尊利、一夏九旬乃間、毎日奉拝慈尊者云々、」とある。
(17) 真木大堂由緒によると「人皇第四十四代元正天皇ノ御宇養老二年中、僧仁聞国東六郷満山開基ノ時造営する所ナク、当時此里ニ一大栢樹アリ、長サ九百七十丈、朝夕樹ノ陰ハ数里ノ外ニ及ベリト云フ、仁聞大士悲陀ノ匠ニ命ジテ、此樹ヲ伐ラシメ、材トナシ一木ヲ用ヒテ建立セラレタルモノナリト国碑ニ伝ヘ来レリ」云々とある。この文は富貴寺大堂記と殆んど同様である。（大分県史料、富貴寺文書収）
(18) 藤井宣正著「仏教辞林」六一四頁。

(19) 拙稿「八幡弥勒寺の写経」（豊日史学一二八号）三〇～三二頁、山口松雲「天念寺の大般若波羅密多経巻」（豊日史学一三三号）

(20) 谷口鉄雄・副島三喜雄氏「豊後高田市の熊野石仏」（仏教芸術三〇号）五一頁、昭和三二年。

(21) 拙稿「権現信仰と太郎天童」（豊日史学、一二九号）昭和三十二年。

(22) 六郷山定額院主目録（管内志志国崎郡下十恩寺の項）

(23) 太宰管内志、国崎郡下、慈恩寺の項。

(24) 嘗て小野玄妙博士は昭和二年に大乗仏教芸術史の研究を発表され、学界に大きな反響を呼んだ。その中に「大乗仏教の発達は密教を以て最後とするが、今大分の石仏亦大陸系統の石彫芸術として最終期のものであり……」（五四八頁）と述べ、又、「宇佐神宮に於ては大体金光明最勝王経や法華経を根帯とした鎮護国家の思想を基本としていたことがわかる。後になつて出来た護国霊験威力及神（ママ）通大自在王菩薩の尊称もその辺から出て居るのであろう。処が、是以上更に重要な仏教思想が入り込んでいたらしい。それは不動明王を主尊とする密教の信仰である。勿論、此の事に関しては表面から顕に証拠立てる史料はないが、裏面からして暗黙の内に窺知せしむるには充分である。即ち私共の考えに依れば、かの八幡大神の託宣そのものが、恐らく不動明王の修法から来ているものと推定するからである。（五〇五～六頁）と不動信仰が初期八幡仏教に入つていたと主張されている。

五、むすび

以上安貞二年の目録によつて六郷山の宗教儀礼を分析してみたのであるが、この山の儀礼が平安初期の五世紀に亘る信仰の変遷と共に、その法会行事に変化のあとがみられるのである。そのような意味でこの史料のもつ意義は大きいのであるが、今その大要をまとめてみることにしたい。

先ず六郷山の寺院は本寺と末寺・末坊六所権現の四つの組織が合体して出来ているのであるが、権現の方の宗教儀礼は五節供、今始御祈禱、二季祭、というような儀礼が中心で、それに薬師法、法華問答講というような法華経、薬師経、大般若経というような経典に関係する法会を行う。これが六所権現の本中末本山の一般的様式であつた。

それに対して本寺の宗教法会は、年中儀礼的法会と本尊仏を主体とする法会、その他は時代の信仰を反映する法会の三つに大別することができるのである。年中儀礼的法会とは正月会とか修二月会とか又は本尊仏を主体とする法会に関係するが、毎月十八日の観音講とか、二季の法会、四季の法会等がそれである。本尊仏を主体とする法会は大別三分することができる。一は薬師仏に関係する法会で殆んど薬師経薬師講などであり、ついで多いのは観世音菩薩に関する法会である。観音経に関する法会観音不断経、観音講、千手陀羅尼等があり、更に法華経に関する法会としては法華八講、更に法華三十講、法華不断経、修八座問答講などである。法華経や観音経に関する法会の多いことは、この六郷山が天台教学の強い影響をうけている事に発するのである。

しかし、それのみならず、その後のこの六郷山に入る信仰としては浄土教的色彩が強くなり、大念仏や仏名経、往生講などがあるかと思うと、更に天台修験、即ち三井寺を中心とした教学が熊野修験の信仰を通じて大三島の大山祇神社などを経て六郷山に入り、大日如来の信仰、更に曼荼羅供等と共に、修験道から護摩供、不動行法が行われ、遂に独自の太郎天童に完成する面もある。

仏教本来の大般若経や般若心経に関する法会、金剛般若経に関する法会があり、宇佐八幡の初期の信仰である最勝講というような古い法会も残している。それかと思うと、平安の御霊信仰も受入れるといつた雑多な仏教思想が、この山を通じて九州の人々に紹介され続けて来たということが判明する点に、この六郷山の大きな宗教儀礼の意義を見出さなければならないのである。

附記　本稿は昭和三二年度文部省科学研究費による「八幡弥勒寺の史的研究―六郷山との関連による―」の一部である」